



首巻
春貞 (十二)

松平春貞一代記

拝謁

表紙デザイン junichi Matsuda

主な登場人物

- 松平春貞

通称首巻き春さん。本名は松平春貞。尾張藩三代藩主徳川綱誠が市井の女に生ませた子。尾張第六代藩主徳川継友、第七代藩主徳川宗春とは腹違いの兄弟。尾張柳生新陰流免許皆伝。

- 幸江

春貞の妻。尾張藩江戸上屋敷、江戸家老永井主水の一人娘。柳生新陰流の遣い手。理子は春貞との娘。理子の命名は吉宗。

- 沙代

春貞の乳母で育ての母。元文五年四月十二日死去

- 弥生

春貞を生みすぐに亡くなつたとされていた春貞の実母。友子は従者

- 小川笙船

小石川養生所初代肝煎。本道(内科)の医者。江戸の町に住む貧しい病人の現状を目安箱へと訴え出たことが八代将軍吉宗の目に止まり、小石川養生所開設が

命じられたが早々と息子丹治（隆好）に肝煎を譲り隠居した。しかし春貞の屋敷の奥に診療所を建てたことから医師を続けることになった

- ・小川隆好

- 笙船の息子。養生所二代目肝煎

- ・弥三郎

- 養生所に吉宗自らが送り込んだ腕利きのお庭番。後に春貞の屋敷で働くようになり、春貞の軍師的存在。寛保二年（一七四二年）九月一日、享年七十歳で死去

- ・佐吉

- 弥三郎の甥にあたる若くして優秀な御庭番

- ・米道格左衛門

- 尾張御連枝松平家時代の春貞の友。春江館館長。夏穂の夫

- ・夏穂

- 太子堂長兵衛の一人娘で剣の虫。春貞夫婦の養女となり米道格左衛門と夫婦になつた

・堀田万之助
尾張藩江戸藩邸剣術指南役および江戸家老永井主水の用人だつたが春貞の屋敷に加わる。田宮助左衛門の娘秋子と祝言を挙げた。春江館師範。道之助は秋子との一子

・横手富三郎

西国を武者修行で回っていた無外流の遣い手。槍の名手でもあり格左衛門を頼り江戸へ出てきて春貞の屋敷で働くことになつた

・留吉

春貞らに命を助けられたことから屋敷の下僕として働くことになつたが奈美と祝言を挙げた

・田宮助左衛門

御納戸同心だつたが上役に裏切られて浪々の身に。妻は亡くなり娘秋子と二人暮らしだつたが、縁あつて春貞に仕える

・秋子

田宮助左衛門の一人娘。堀田万之助と結ばれる

- ・田宮（石川）奈美
木更津の代官、石川賢之介の弟仙之助の娘。父の敵を討つことが出来、春貞の屋敷で田宮助左衛門の二人目の娘として生きることを決意。留吉と所帯を持つおよし
- ・幼少とき女衒に売られ吉原の遊女に。留吉の妹。春貞に身請けされ屋敷内に建てられた診療所で小川笙船の助手となる。井之上新界と結ばれる
- ・井之上新界
- ・小田原の廻船問屋の息子。長崎に遊学し阿蘭陀医学を学んだ帰りに小川笙船の門を叩き向島診療所で働くことになった。またおよしを妻に娶る。
- ・静香
- ・父の無念を知らしめようと武家屋敷の刀を盗む女賊だつたが春貞の屋敷で奉公することに。亡き弥三郎に女忍びの技を伝授された
- ・伊丹鉄太郎
- ・南町奉行所、定町廻り同心で春貞の親友。一刀流の遣い手。深雪は恋女房
- ・徳川吉宗
- ・徳川第八代将軍

・徳川家重
徳川吉宗の長男として江戸赤坂の紀州藩邸で生まれる。生来虚弱の上、障害により言語が不明瞭であつた。吉宗が隠居後第九代将軍となる

・徳川宗勝

尾張藩第八代藩主。幼名代五郎。御連枝川田久保松平家時代に春貞や米道格左衛門と共に成長し春貞を兄として慕つてゐる

・定吉

小石川金杉水道町を縄張りにする地元四代目の十手持ち

・政五郎

室町一丁目長濱町高砂新道沿いに鳶の店を張る「い組」の頭

・岩次郎

須田町で十手持ちと金貸しの二足のわらじを履く

・長兵衛

日本橋元鳥越仏壇仏具商／太子堂の当主だつたが隠居。夏穂の実父。妻はお糸

・相模屋清右衛門

日本橋両替商相模屋の隠居

- ・三井高房
- ・江戸一の分限者、越後屋の隠居
- ・山田浅右衛門吉時
- ・公儀御試御用を勤める一方で斬首刑の執行を依頼されたことから人斬り浅右衛門、首切り浅右衛門などと呼ばれた。源蔵は息子で後の吉継
- ・近江屋金右衛門
- ・名古屋の札差近江屋の隠居
- ・近江屋金次郎
- ・名古屋の札差近江屋の当主

首巻き春貞（十二） 拝謁

目次

第一章 誕生と死

十頁

第二章 見えない敵

二十八頁

第三章 吉宗の決断

四十四頁

第四章 尾張への旅

五十六頁

第五章 拝謁

百六十二頁

第一章 誕生と死

一

寛保三年（一七四三年）も師走が間近になつた霜月の二十三日、春貞の屋敷に南町奉行所常廻同心伊丹鉄太郎が駕籠で妻の深雪を連れてきた。側には八重がびたりと連れ添い、甲斐甲斐しく世話をしている。

「おお、伊丹さん。今日は深雪さんの検診かい」

春貞が玄関で迎えると伊丹は頷きながら、

「八重さん、先に深雪を笙船先生のところへ連れて行つてくれ。俺もすぐに行くからな」

と言い、深雪と八重を診療所に向かわせた。

その後ろ姿を追いながら伊丹は、

「春さん。だらしがねえ話しだが俺は心配で心配でならねえんだ…」

と口ごもつた。

「深雪さんのことだろうな」

「うむ。子供ができたことは嬉しいに違ひねえが、深雪は承知のような体だ。まだ一人で歩くまでには至らねえが最近はお陰様で目方も増えて体力もついた。しかし春さん、あの体で子を無事に生めるのだろうか。

ええ、それを考えるとな、真夜中に目が覚めてしまうんだ」と訴えた。

「出産予定は奈美と同じ来年如月（二月）の終わり頃と聞いたが、今のところは順調なんだろう」

春貞は玄関の上がり框に腰をかけて逆に問うた。

「うむ。笙船先生は安心してよいと言つてくれている。

その言葉を疑るわけではねえが、もし…もし子を産むことで深雪に万一のことがあつたら俺は悔やんでも悔やみきれねえ、春さん…」

明らかに寝不足の眼を擦りながら鉄太郎は春貞の横に腰をかけながら訴えた。

「伊丹さん。釈迦に説法だし何のつづかえ棒にもならない答えだが、ここは先生方にお任せするしかあるまいよ」

春貞が鉄太郎の肩をポンと叩いたとき、

「旦那さま。早く来てくださいましよ。先生のお話を一緒に聞いていただかねば困りますだ」

八重が怒つたような声を上げて駆けてきた。

「八重さんはまるで俺たちの母親のようでな、俺はこの調子で叱られっぱなしよ」

苦笑しながら鉄太郎が腰を上げた。

鉄太郎が診察室に入ると深雪が笙船やおよしと雑談をしていた。

「おお、旦那が見えましたな」

笙船が破顔し、その表情を読み取った鉄太郎が胸をなで下ろしたのがおよしにはわかつた。

「順調だそうですよ伊丹さま」

およしがそう言うと鉄太郎はウンウンと頷きながら笙船に頭を下げた。

「いまな、八重さんにも聞いて貰つたがお子は順調だ。食欲もあるようだしな。したがつて旦那も安心してよい。ただし……」

笙船がそう言うと鉄太郎は緊張の体で笙船を見た。

「また心配顔になつたぞ」

と笑いながら笙船は、

「医者としての心配は深雪さんの足腰がまだまだ不安定だ。したがつてな、いまの大事なときにまかり間違つても転倒するようなことにならぬよう八重さんに願つておつたが伊丹さんもな、その点だけは注視してやつてくだされ。

そしてまた来月な、かならず来てくだされよ」

笙船はそう言いながら診察は終わつたことを示唆した。

八重の肩に掴まりながら診察室を出た深雪の後ろ姿を見ながら伊丹鉄太郎は再び笙船の前に座つた。

「先生。先ほども春さんに愚痴つたところだが、深雪は本当に元気な子を産める体なのかい。というより母体は大事ないのだろうか」

と問うた。

「大事ない」

笙船は即座にそう言い切つた。

「今の様子では大事ない、伊丹さん。

繰り返すが深雪さんは目は勿論、足がまだ不自由じやから転倒だけが心配じや。

しかし後は自分でできることはなるべく自分でさせようになされ。体も適度に動かすことが肝心じやからぬ」

そういう笠船に鉄太郎は深々と頭を下げた。

診療所を出た鉄太郎は思わず抜けるような青空を仰いだ。

何故か自然に涙が溢れ、背にしている松の老木にも、奥の竹藪にも手を合わせたい気分だつた。

「旦那…」

そのとき留吉が後ろから声をかけた。

振り向いた鉄太郎の顔を見た留吉は鉄太郎の素振りを見ていたのだろう、すでに泣き顔だつたが絞り出すように、

「あっしが舟でお送りしますんで…」

と呟くと伊丹は、

「ありがてえ。しかし俺がお縄にした男と一緒に女房に子ができたなど、どういう悪縁なんだろうな」

と悪態をついた。

「またまた旦那、昔のことを…」

留吉と鉄太郎は泣き笑いの態で肩を並べて母屋へと向かつた。

二

こうして期待と不安が入り交じつた寛保三年も終わり、寛保四年（一七四四年）が明けた。

相変わらず春貞の屋敷は新年から賑やかだつた。ただし奈美が動けなかつたので正月の支度はもっぱら秋子と静香がそして弥生の従者友子が奮闘していた。

元旦は使用人も含めた屋敷の者たちだけで過ごしたが、二日は例年通り江戸の大店の店主たちが嬉々として集まつた。

越後屋の三井高房をはじめ、仏壇仏具商太子堂の隠居長兵衛夫婦、両替商相模屋の隠居清右衛門、そして春江館の女弟子たちの親たちが集まつて大変な熱気だつた。

話題はさすがに時の流れを敏感に読む主人たちだつたからか、次期將軍が誰にな

るかで議論が白熱した。

どこから漏れたのか、巷でも吉宗が隠居するという噂が出回っていたからだ。

「やはり順当に考えればご長男の家重さまでございましような」

「さようですな。しかしお言葉がご不自由では政務に支障があるのではという心配があるようです」

「しかし御次男の宗武さまは幼少より聰明で、荷田在満や賀茂真淵に国学・歌学・万葉を学んでおられるとのこと。ご老中の中には宗武さまを推す方もいらっしゃるようですが」

「上様はご健康に問題があるわけではないようですが、いましばらく将軍職をお続けいただいた方が安泰ではないかと思いますがな」

「まあしかし、皆様方。家重さまにしろ、どちらがご就任なさつても米の値段が安くなるわけではござりますまい」と言いたい放題だつた。

事情を知る春貞は口を挟まず、ただただ苦笑するしかなかつた。

ただし例年この日に訪れる山田浅右衛門吉時だけでなく息子源蔵の姿もなかつた。また小石川金杉水道町を繩張りにする地元四代目の十手持ち、定吉の姿もな

かつた。

「定吉親分は伊丹さんが恋女房のあれこれの心痛で役に立たないから代わりに忙しいのかも知れんな」

春貞が冗談にいうと幸江は、

「そんなことはございませんでしようが、八丁堀の方たちは正月も待つたなしのお役目ですからね。」

そうそう、大げさなことはやらないと一昨年内輪で祝言をあげられましたが親分の娘さん：お佳さんと金次さんが夫婦になり子が生まれてから親分も嬉しくて腑抜けになつちまつたとお勢さんが笑つてましたね」と呟いた。

「そうだつたな。これで定吉親分の世継ぎは金次に決まつたわけだ。将軍のお世継ぎもそんな感じにとんとん拍子に進めばいいのだがな」

春貞が苦笑した。

四日は久しぶりに井之上新界の両親、義和と多恵が顔を出した。
新玉の挨拶を終えたおよしは、

「婆さまはいかがされましたか」

と一緒にない義和の母、綾のことを気遣つた。

「はい。本人は是非にも伺いたいと申しておりましたが何分高齢で体が動きませぬ。一緒にあらば手前どもの支度も大がかりになりますので今回は遠慮させてございます」

義和が説明するとおよしは新界を振り返り、

「落ち着きましたら私共夫婦で小田原まで伺いたいものですね」

と言い、義和と多恵を喜ばせた。

ただし向島診療所は三日から開所することになっていたため新界とおよしは両親と一緒に過ごすわけにはいかず、挨拶の後は昼餉の膳を一緒に囲んだ。そしてその夜義和と多恵は屋敷に泊まることになった。

まだまだ新玉の年という氣分が抜けない二月二十一日に改元があり、寛保が延享と改まった丁度その日、深雪は大きな腹を抱えながら春貞の屋敷に出産準備のためやつてきた。

奈美の腹も同じように大きく目立っていたが出産には産婆が立ち会うものの、何

といつてもここには常時三人の医者が揃っていた。

特に深雪の場合は日中、いや場合によつては深夜まで南町奉行所同心である鉄太郎はお役目で留守の場合が多く八重も含めて心配が重なつていた。

それを察した幸江が役宅ではなく春貞の屋敷で安心して子を産むべきだと提案し鉄太郎もそれを願つたからだつた。

無論深雪の世話をするため八重も屋敷に同居することになつた。

深雪は伊丹と一緒になる前、一ヶ月ほど春貞の屋敷で過ごしたことがあるので勝手は知つていたが八重はしばらくここに住めると聞いて喜びを隠さなかつた。

「お役宅が嫌だというのではありませんよ。ただね、旦那様のお帰りが遅いことが多いしご近所さまも皆八丁堀の旦那衆ですから同じ。養生所のように大所帶になれた者には些か寂しいものですよ旦那。

その点こちらのお屋敷はいつも笑え声が途絶えず嬉しくなつちまう。いや剣術の掛け声もよいもののですだ

と八重はご機嫌だつた。

結局、予定日より多少遅れた三月二日に奈美が男の子をその六日後に深雪が女の子を出産した。

深雪は多少難産だつたが、幸いなことに鉄太郎の心配は奇遇に終わり母子共に無事であつた。

そんなとき、久しぶりに定吉が女房お勢と顔を出した。

ちょうど鉄太郎がいたときだつたが定吉は、

「旦那、お子の誕生おめでとうございます。

お役宅ではなくこちらだと伺いましたので女房とご挨拶にと・正月に伺えなかつたもんですから」

と角樽を差しだした。

「おう、これは申し訳ねえな。

俺が役立たずだから手数をかけて済まねえ」

鉄太郎が破顔して受け取り、

「それにしても定吉、どうだえお爺ちゃんになつた気分は

と問うと、

「いやはや、女房ともいつも言つてますがね旦那、こればかりは頭で考えるのと実際に経験するのでは大きな違いですぜ。

お勢など、お佳にはまかせられない、自分が育てると言い出しやがつて喧嘩ばか

りしますぜ」

定吉が苦笑するとお勢は、

「だつて旦那、危なつかしくてさ、見ちやあいられませんよ」

と口を尖らせた。

屋敷内は祝賀の気分で大いに盛り上ががっていたが、春貞や格左衛門らはかつて幸江の出産時に襲われた経験を生かして警戒を怠ることは無かつた。

そして奈美は勿論だが深雪も床上げの日まではそのまま春貞の屋敷に留まることになつたため、夫の伊丹鉄太郎も春貞の屋敷から奉行所に行き来する毎日となつた。

「春さん。話したことはなかつたかな、俺は兄弟のない一人っ子だつたから可愛がつて貰つたものの些か寂しい子供時代を過ごしたものよ。

だからだろうな、奉行所からここに帰るのが楽しみでならねえ。

このわいわいがやがやの雰囲気が無性に嬉しいぜ‥。

八重も同じような事を言つたそつだが、人間氣心の会う人に囲まれてゐるのは心地よいものよなあ」

と夕餉を終えた後に呟いた。

格左衛門が、

「伊丹さん、 いつそのことこの屋敷に深雪さん、 八重さん共々移つてきたらどうですかな」

と真顔で言つた。

弥生も真顔で頷いている。

一同を笑顔で見回した鉄太郎は、

「許されるなら俺もそうしてえ。しかし八丁堀の役宅を離れるときはお役目を離れるときだ。まだやり残したこと多多々あるしな…」
と誰にともなく呟いた。

向かい側に座していた留吉が、

「伊丹の旦那。お子の名はお決めになりましたので」と聞いた。

「それよ。二、三考えてみたがいまひとつしつくりいかねえ。
女子の命名は難しいぜ。

そつちの息子の名は決まつたのかい」

鉄太郎は問い合わせた。

奈美も深雪もまだ床上げ前なのでその場にはいなかつた。

「いえ、しかしあいつの父親はこのあつしですかからな。そんなに洒落た名をつけ
るわけにはいきませんや」

と笑つた。

「違えねえ。しかしその点は俺たちの娘も似たり寄つたりだ。

そこの理子さんのようにまさか公方様が名付け親になつてくださるはずもねえか
らな」

鉄太郎は機嫌良く破顔した。

理子は美しい笑顔で、

「父上に頼んでいただければ公方様が命名してくださるかも知れません」
としつと答えて一同を驚かせた。

すると鉄太郎は、

「理子さん、勘違いしてはいけねえ。

お前さんは特別なんだぜ」と真顔で呟いた。

大事を取り、床上げ後もしばらく深雪は春貞の屋敷にやつかいになつてから役宅に戻つて行つた。

三

それから一ヶ月半ほど経つた卯月（四月）十八日、山田源蔵から山田浅右衛門が危篤との連絡があり、急ぎ春貞は静香と留吉を連れて浅右衛門の屋敷に向かつた。

留吉の操る舟で大川を渡り平川丁の屋敷に急いだ。

留吉の手にはいつもの六尺棒が、静香の手には浅右衛門への見舞いの品を収めた風呂敷づづみがあつた。

屋敷に入ると早速浅右衛門が伏せている部屋に通されたが、そこには息子の源蔵をはじめ親族および愛弟子十数人が覚悟の態で座していた。

「父上。春貞さまが来てくださいましたぞ」

源蔵がそう声をかけるとそれまで眼を瞑っていた浅右衛門はかつと目を開いて起きようとしたがかなわず、弟子たちに支えられてやつと座すことができた。

「浅右衛門どの。ご無理をせず横になつてくだされ」

春貞が臥所の近くに座して言うと、

「春貞どの。伏せているのにも飽きました」

と弱々しく笑つた。

誰が見ても浅右衛門吉時の命はいまにも消えそうだつた。

源蔵が思わず、

「父上、後事は何卒お気に召されず、お心安らかにお願いいたします」

と声をかけると吉時は、

「うむ、後を頼んだぞ」

と軽く頷いた。そして春貞に顔を向け、

「息子のこと、よろしくお願ひ申す。

しかし、貴殿と知り合うことができ嬉しゅうござつた。

そう、ここだけの話し：尾張下屋敷に貴殿らと一緒に攻め込んだ時は楽しかつ

た：」

そう言いながら前のめりになりそうになつた吉時を春貞が両手で支えた。

吉時は、

「源蔵、春貞どのたちとお前を除いて人払いを頼む」と小さく呟いた。

「承知しました。しかし何故でござりますか」

源蔵が耳元で問うと吉時は、

「なに、昼寝のじやまになるわい」

と真顔で言い捨てた。

親族や弟子たちが渋々別室に引くと、

「春貞どの。千代田城はどちらの方角でござつたかな」と問うた。

春貞が無言で右手を挙げると吉時は、

「吉時最後の頼みでござる。この身をお城の方角に向けてはいただけまいか」静かにゆつくりと、しかし威厳を込めて願つた。

春貞は領きながら源蔵と二人で吉時の軽くなつた身を千代田城の方角に向けると吉時は結佐趺坐したまま暫く瞑目していたが、そのまま静かに息を引き取つた。

それまで無言で吉時の姿を見つめていた静香と留吉が、一筋の涙を流した。
公儀御試御用おためしごようを仰せつかつた稀代の傑物が逝つた。
その跡目は源蔵が山田浅右衛門吉継として就いた。

第二章 見えない敵

一

山田浅右衛門吉時が亡くなつて一ヶ月ほど経つたある日、源蔵改め山田浅右衛門吉繼が春貞の屋敷にやつてきた。

公儀御試御用の跡目を継ぐ手続きなどが終わつたとかで挨拶に来たという。

「いかがですかな。少しほ落ち着かれましたかな」

客間に同席した米道格左衛門が聞くと、

「はい。病氣で伏せていた時期も長うございましたので覚悟はできておりました。しかしいざ山田浅右衛門としてお役目を継ぐことになりますと父の偉大きさを改めて実感し、まだまだ精進しなければならぬと決意を新たにしたところです」吉繼はしんみりと答えた。

「春貞さま。世間的に申せば実父の死にあたり、喪に服すべきと存じますが父の

遺言にて当家は喪に服すには及ばずとのことでした。

我らは罪人とは言え、人様を死に至らしめるのがお役目。

ひとつにはそのお役目に休みはないこと、そして父の持論でございましたが、もともと（喪に服す）とは「死は穢（けが）」れであり、その穢れを他の人に移さないために身を隠し神事は控えるという習慣だとか…。

無論死者への悲しみのために慎み深い暮らしをするという考えも加わってはいると存じますが、我らのお役目はその穢れに直接関わっている。故に喪に服す必要はないとの遺言として、こうして早速あれこれと動いている次第…。

まあ世間では奇異に見られましようがな」

と笑い、居住まいを正し、

「春貞さま。父へのご厚情まことにありがとうございました。

またこれからも父同様よろしくご指導およびお付き合い下さいますようお願い申します」

と頭を下げた。

「吉継どの。お手をお上げ下され。

こちらこそよろしゅうお願い申す」

春貞も頭を下げて挨拶は終わつた。

吉継は、

「ご承知のように父が存命中からそれがしは俳諧を学び、それがしの手で命を失う者たちの辞世の句を理解し、依頼があればそれを残し家族らに託す事を心懸けてきました。

とはいえそれがしの理解もまだまだでございますのでこれまで以上に笙船先生らの薰陶をいただきたいと考えております。

為にこれからも立ち寄らせていただくこと、お許し願います」と春貞に願つた。

ちなみに山田浅右衛門に科せられたお役目は御試御用と呼ばれる刀剣の切れ味を確認することから発してこの頃には罪人の斬首代行を仰せつかつていた。

試し斬りは死人（首の無い場合が多い）すなわち屍を土壇とよばれる土盛りの上に仰向けに置き、両手両足は非人が押さえて基本となる一の胴と呼ぶ位置を一刀のもとに切断する。

現在でも「土壇場」という言葉が使われ、進退きわまつた状態を意味するが語源はこの土壇から来ている。

そして試し斬りに使つた刀剣の切れ具合や刃こぼれなどがないかどうかなどを仔細に報告する役目だつた。

山田浅右衛門は屍の確保から据物斬り、刀の切れ味の報告までを幕府の役人が列座する中、厳かで緊張感に満ちた儀式として執り行なつた。

將軍家御道具の試し斬りは幕府にとつても浅右衛門とその弟子たちにとつても伝統と古式に則つた晴れなる行事だつた。

さらにそれとは別に罪人の首を落とすお役目も加わつたため、首斬り浅右衛門などと揶揄されることもあつた。

辞世の句云々は無論後者の役目に関係したことである。
さて春貞は、

「無論のことです。

ちょうどこの時刻は診療所を閉める時間ゆえ、笙船先生もしばらくはゆるりとされるでしようから是非お顔を見せてください。
きつと喜びますでな」

と破顔してそう言つた。

その翌日の夕刻、米道格左衛門は留吉を従者として日吉山王大権現社の近くにある京極周防守屋敷を辞して戻る途中だつた。

藩主の京極高長きょうごくたかながが参勤で屋敷にいたこともあつていつもより大分遅くなつていた。

「旦那。お屋敷で提灯をお借りして良かつたですな。
もうすぐ日が落ちますでな……」

留吉が赤檼の六尺棒を肩に担ぎながらそう言いかけて足を止めた。

「留吉、どうやら待ち人のようだ。後ろに下がつておれ」

格左衛門が低い声で命じた。

「ほう。またお主か。

追い回すのも大変よのう」

格左衛門はからかうように呟いた。

「過日は邪魔が入つた。

今度こそ命はないものと思え」

しゃがれた声で間合いを詰めた男は以前夏穂と連れだつていた際に襲つてきた武士だつた。

留吉も格左衛門の後ろで六尺棒を構えた。

「手を出すなよ」

そう留吉に言い残した格左衛門は鯉口を切つて拔刀した。やはり相手は並々ならぬ凄腕のようだ。

刹那格左衛門は間合いを急に縮めた。

「シユツ」

抜刀する音が聞こえ刺客の剣が格左衛門の左肩を襲つた。

「旦那」

留吉が声を出した。

格左衛門は寸毫躊したもののはり切つ先が伸びて給の肩口が切り裂かれた。

「むつ」

格左衛門が唸つた刹那刺客の刀はすでに鞘に収まつてゐる。

留吉には刺客の抜刀や鞘に収めた動きが見えなかつたほどの技だつた。にやりと笑つた刺客が再び仕掛けた。

と同時に格左衛門が飛び退きつつ上段から愛刀を振り下ろした途端、

「ガキーン」と鈍い音がして刺客の剣が真つ二つに折れた。

刺客は一瞬信じられない様子で立ち尽くした刹那、格左衛門の切つ先が男の頸動脈を切り裂いていた。

留吉には格左衛門が相手が抜いた刹那距離を置き、突いてきた剣の峰を叩いたようと思えたが、

「む、無念…」

唸り声のような言葉を残して男は「どつ」とその場に崩れ落ちたがその手にはまだ折られた剣が握られていた。

「だ、旦那。肩から血が」

留吉が懷から取りだした手拭いを裂いて血止めをしようとしたが、格左衛門は頓着せず血ぶりをした刀を納めながら横たわっている男の前にかがみ込み握つてゐる刀を指から外した。

「ほう。やはり夏穂が言つたように柄頭に細工がしてあつたわい。だからこそ柄

を伸ばしても手から外れないわけだ」

格左衛門にやつと笑みが浮かんだ。

「旦那はやはり凄い凄い。

相手の刀を折ってしまうんだから…」

興奮冷めやらぬ留吉が手拭いで肩を縛ると格左衛門は、

「済まんな。ただしかすり傷よ。

しかし手強い相手だつたな」

と言いながら立ち上がった。

格左衛門はすでに闇となつた周囲を静かに見回したが、

「どうやら仲間はいないようだ。ということは誰に雇われたのかは分からずじまいか：」

と深い息を吐いた。

「とはいえ旦那。尾張との戦いはすでに終わつたはず。いくら何でもそうそう敵はおりますまい」

留吉が提灯に火を入れながら応じると、

「そうよなあ。

ということは例の老中筆頭の差し金と見て良いのかのう」

格左衛門が呟くと、

「であれば、これからもまだまだ敵が現れるということですかい旦那」

留吉がため息交じりに言い切つた。

二人が屋敷に戻り春貞に報告にと居間に入ると一同が格左衛門の肩の手拭いを見て騒ぎ出した。

「格左衛門さま」

夏穂が飛びついてきた。

「痛いぞ夏穂。大事ない、大丈夫だ」

苦笑しながら格左衛門は春貞の前に座り、

「京極さまのお引き留めで遅くなりましたが、出稽古は無事済みましたぞ春さん

」

と言うと春貞は、

「ご苦労でした。出稽古は心配しておらぬが、出おつたか」と話柄を変えた。

領いた格左衛門に井之上新界が薬籠を持つて無言で近づき、血止めの手拭いを外して傷口をあらためはじめた。

「これは先生、恐縮」

笑顔で札をいうと一同が傷口に注視した。

「米道どのに傷を負わせたとなれば、昨年夏の相手でしたか」

堀田万之助が確信に迫った。

「間違いない、堀田どの」

と格左衛門が答えると湯飲みを置いた小川笙船が、

「しかしご一同。昨年米道さんと夏穂さんが襲われたのは八月のことじやつたと記憶しておる。

なぜにまたそれから九ヶ月も経つての襲撃なのじやろうのう」

首を傾げた。

「確かに。それがしは月に一度京極さまのお屋敷に出稽古のためあの当たりを通るのは知られておろう。

先生がおつしやるようと思えばのんびりした刺客だのう」

格左衛門は薬を塗られ晒しで巻かれた肩を摩りながら、

「井之上先生、お手数をおかけしました」

と礼を言つた。

「なに、ご本人がおつしやるとおりかすり傷ですよ。念のためです」

井之上新界が薬籠を閉じながら言つた。

「格左、自分の身で奴の間合いを推し量つたのか」

春貞が真顔で問うた。

「うむ。まあ、そんなところだ。

奴が昨年と同じ手で向かつてくるかは分からなかつたし、恐ろしく変わつた抜刀術よ。

それにあのとき話し合つたが妙に切つ先が伸びる技をな再確認したかつたのだ：

格左衛門の話が終わらぬ内に留吉が、

「旦那は凄かつたですぜ。なにしろ一刀のもとに奴の刀を真つ二つにしちまつたんですぜ」

己のことのように自慢げに話す留吉に苦笑しながら格左衛門は、

「春さん、承知のように剣の泣き所の一つは峰だ。

最初の抜刀で勘所を掴んだ俺は次に奴の剣が鞘走った瞬間後ろに飛び下がりつゝ奴の刀をたたき割つたということよ」

と肩を押さえながら言つた。

そのとき夏穂は、

「格左衛門さま。刀の柄はどうなつておりましたか」

好奇心一杯の態で尋ねた。

「おう、そのことよ。

夏穂の推察通りな、柄頭が見た事もない形で盛り上がつておつた。

その為に抜刀した瞬間に柄の握りを緩めたとしても手から外れることはないし、
その分切つ先が伸びる……。

とはいってもすぐに真似の出来る技では無いしあれは正しく邪剣よ。

恐ろしい相手だつたぜ春さん

格左衛門が呟いた。

三

その十日後、今度は堀田万之助が井伊掃部頭家の上屋敷へ出稽古に向かつた際に襲われた。

井伊家への出稽古を紹介してくれたのは亡き山田浅右衛門吉時であつたが享保十八年（一七三三年）からだから早くも十年が過ぎていた。

しかし出稽古が始まつてから二年後に彦根藩第八代藩主、井伊直惟が亡くなり出稽古の存続が危ぶまれたが、後を継いだ井伊直定は万之助の人柄を気に入り出稽古を続けるよう要請があつたため今日まで月に二度ほど上屋敷に出向いていた。そもそもと亡くなつた井伊直惟は将軍徳川吉宗の世子・徳川家重の加冠の役を務めたほど吉宗に心酔していた藩主であり、その後を継いだ直定も質素儉約を旨とし、奏者番を務めていたことから率先して自ら規律を守り実践していた。そして江戸城中でも握り飯の弁当を持参していた。

「万之助どの。いたずらに話題にすべきことではないが上様の後継に春貞どのは長幼の序を理由に家重さまを推されたとか。

眞のことでござるか

稽古が済んだ後で呼ばれた席で井伊直定が問うた。

「それがしごときが上様の後を継がれるお方のあれこれを存じてはございません。また主人春貞も殿さまが申されたとおり家重さまをと申したわけでもなくあくまで世の混乱を招かないためにも長幼の序をお守りすべきと上様にお話しされた由。

しかし殿さま。それが春貞は家重さまを推したと思われ、我が屋敷の者が刺客に襲われております」

「真か…」

「はい」

「その目的が家重さまを廃すためのことであるなら断じて許せんな。

承知かと思うがのう、我が前藩主直惟さまはその家重さまの加冠の役を務めたことでもあり、ここだけの話し余も家重さまが後継となるべきお方と思うておる。いざれにしてもなるべく早々に上様のご決断が迫られるのう」

井伊直定は腕組みして唸つた。

そういえば井伊直定の人となりを伝えるエピソードが残っているという。

それはある日の事、直定が望遠鏡を覗いていた際に酔つた家臣を見つけたときのことだ。

傍にいた家臣にその様子を見せたが、誰もが告げ口を避けるために酔つた家臣の名を明かさず、景色を褒め酔つた家臣のことに触れるのを避けた。

ただ一人だけ、得意げに酔つた家臣の名前を報告した者がいたが、直定は後で「（告げ口した家臣は）余の傍に置く人材ではない」と不快感を示したという。自身の立身出世のために同僚を売るような行為を卑しんだとされる。

「万之助どの。気を付けてな」

藩主の声を背に上屋敷を出た万之助と伴として同道した佐吉と共に南に下がり、霞ヶ関を過ぎたあたりで殺氣を感じて歩みを止めた。

「堀田さま。どうやら三人、いや四人はおるようでございますよ」

佐吉が落ち着いて呟いた。

「うむ」

と答えるながら万之助が鯉口を切つた。

「何者?」

万之助が声を上げたが左右から笠を被つた男たちが三人抜刀し抜き身を下げ無言

で近づいて来た。

一人が下段のまま、もう一人が青眼に、そして三人目は脇構えにして二人を囲んだ。

じりじりとその輪が縮まつてくる。

青眼に構えた男が間合いを詰めた刹那、佐吉が反動も無く飛び上がり万之助がなんと大小を両手で抜いたと思つたら光が交差し飛びかかってきた二人が同時に血しぶきを上げ、残りの一人の眉間に小柄のような鉄片が突き刺さつていた。鉄片は道沿いにある松平美濃守屋敷の土塀に飛んだ佐吉が投げたものだつた。

「どおつと三人が崩れ落ちたとき、土塀の影から男が一人姿を現したが、

「ふむ。話には聞いておつたがこう凄腕では報酬を増額してもらわねば割に合わんな……」

と捨て台詞を吐きながら足早に去つて行つた。

「上から確認しましたが敵が残つている気配はございませんな

降りてきた佐吉が倒れた男たちの笠を取り、その顔を確認しながら言つた。

「それにも堀田さま。二刀流とは恐れ入りました」と笑顔を向け堀田が照れた。

第三章 吉宗の決断

一

時は入梅も開け始めた頃になつていたが、格左衛門と万之助が刺客を倒してからは格左衛門にしろ万之助にしろ、そして夏穂にしても出稽古の際に襲われるということはなかつた。

しかし敵は単なる物取りでないことは明らかだつたし、春貞が出歩く機会はこの頃ほとんどなかつたから、その代わりとして格左衛門や万之助が狙われたのだろうと推察された。

「しかし春さん。俺などを切つたところで春さんや上様のご判断が変わる訳はないし無駄なことをするものよ」

格左衛門は夕餉の後で呟いた。
万之助も頷いている。

「何にせよ俺に対する警告よ。

次期将軍選びに口を出すな、家重さまに肩入れすると酷い目に会うぞとな」春貞が応じた。

「まったく厄介なことになつたものよ。

承知のように俺は名指しで家重さまを推したわけではなく長幼之序を守るべきだと申し上げただけだ……」

思わず愚痴のような物言いになつたが弥生が、

「上様から生殺与奪の命をお受けになつたときからの春貞、あなたの宿命でござりますな」

と静かに言い切つた。

「母上、その生殺与奪の命にしても俺が好き好んで受けたわけではありませんぞ。俺たちの祝言の席にお呼びもしない上様が突然現れて……」

思わず春貞は母に愚痴を漏らすと、

「しかし春貞。その春貞だからこそ死んだことになつていた私を救い出してくだされたのです。一介の浪人者、いや旗本であつてもなかなか出来ることではございません。

私はいまの春貞が好きでございますよ」

弥生が慰めか、優しい言葉を投げかけると負けずと幸江も、

「はい。私も今の春貞さまが大好きでございます」

と声を上げたので理子をはじめ一同に笑いが起こり、当の春貞は照れて下を向いた。

堀田万之助が、

「しかしご決断は上様しかできませぬが、上様はすでにお世継ぎをお決めになつ

てるのでしようかな」

と誰にともなく呟いた。

「そうよなあ。俺は幕政への影響や老中はもとより家臣たちへの影響を考えるとなるべく早く次期将軍を発表なさるべきと申し上げたが、城の中はそうそう簡単なものではないのだろうよ」

春貞が氣の毒そうに言い切った。

「まさしく上様であつても、いや征夷大將軍であればこそご自身の思いを素直に
出すのも憚れるのかも知れませぬな」

田宮助左衛門が眼鏡を外しながら言つた。

そこへ奈美と秋子が茶を運んで来た。

その盆のひとつを受け取つた友子が、

「そうそう。秋子さま。夏物の小袖を先ほど拝見しました。
弥生さまのお召し物だけでなく私のものまでご用意いただきありがとうございました」

と礼を言つた。

「いえいえ、少々遅れを取りましたが順次皆様のお召し物も夏物に替えていただけ
くべく準備をしておりますのでしばしお待ちを」

秋子が隣の奈美と静香に目配せしながら答えた。

四月の声を聞くとそろそろ夏物に替えるべく洗い張りや仕立て直しをやらなければならなかつたが、沙代亡き後は秋子が奈美と静香の手を借りて奉公人の着物に至るまでを準備していた。

「どうか、すでにそうした季節になるかのう」

小川笙船がため息をついた。

「いかがしました先生、ため息などおつきになつて」

留吉が問うと、

「いや、歳を取るとな月日の流れが嫌に速いものよ。

若い時には一日も長かつたし正月から大晦までは永遠の間のように感じられたがのう、この歳になると一ヶ月などあつという間じや」

笙船が愚痴ると弥生も、

「さようですね。年寄りでもそれなりにやりたいこともあるのですが体が言うことを聞きませぬし先生のおっしゃるようにすでに限られた時間すら短く思えて寂しいものですな」

と応じた。

そのとき手水に立っていた夏穂が飛び込んで来て、

「父上。あの家重さまがお見えになりました」と叫んだ。

「まつたく我が城も忙しいものよ。

助左衛門、客間にご案内してくれ。

しかし噂をすればなんとかだな…」

春貞は真顔で言つた。

日は長くなりつつあつたがすでに辺りは夕闇に包まれていたものの、春貞が客間に向かいながら門前を注視すると沢山の提灯の灯りが揺らめいていた。

「これは家重さま。ようお越しになりました」

春貞は精一杯の笑顔で挨拶し平伏した。

側近の大岡忠光がこれまた笑顔で、

「相変わらず夜分に申し訳ござらぬ。

こちらの都合なれどこうした時刻でないとなかなか出向けませぬのでな。お許しあれ」

と頭を下げた。

「はる……んや……はうえ……の……うだんごお……らせに……た」

家重が笑顔で口にするとすかさず春貞は、

「ありがたき幸せ」

と返した。

春貞は、

「春貞。今夜は上様の伝言を知らせに来た」と聞いたからだ。

隣の大岡忠光も頷いている。

それによると来月十日に登城せよとの命だという。

「春貞、間違いなく承りました」

平伏して答えた春貞が顔を上げると家重が手招きしていた。

「ははつ」

半間ほど近づいて頭を下げた春貞に家重は、

(大岡、例のものを持て)

と命じた。

大岡は背後に置いてあつた包みを開くと一振りの刀が出て來た。

(これはな、余が元服の際に父上にいただいたものじやが余は剣術をやらぬ。どうやら名刀中の名刀のようだがそれでは宝の持ち腐れ。

大岡と相談してな、そこに遣わそーと持参した。

受け取ってくれ)

家重は不自由な口ぶりにもかかわらず興奮しつつ話した。

「有り難き幸せ」

平伏しながらも春貞は大岡から刀を両手で受けた。

（春貞。抜いて茎を見てみよ）

家重が満足そうに命じた。

貴人が己の前で刀を抜いてみよとはそれだけ相手を信頼していなければ出来ないことだ。そのまま切りつけられることもありうるからだ。

春貞は躊躇い大岡に伺うと大岡も頷いていた。

春貞は体の向きを家重から外し、すらりと鞘から抜き、手際よく目釘を外して柄を外した。

「こ、これは…」

春貞が絶句した。

なぜなら茎の表に見事な愛染明王の姿が彫られ「国俊」の銘があつた。

ちなみに愛染明王とは大日如来または金剛薩埵の変化身といわれ、仏と人との間にあり、愛によつて両者を結ぶと考えられる明王である。

その愛はすべての悪を降伏するもので、一面六臂で他の明王と同じく忿怒相であり、頭には獅子の冠をかぶり、宝瓶の上に咲いた蓮の華の上に結跏趺坐^{けつかふざ}で座るという、大変特徴ある姿をしている。またその身色は真紅であり、後背に日輪を背負つて表現されることが多い密教の神である。

大岡が、

「ご覧のようにどうやら愛染国俊の太刀のようです。

愛染国俊と申すと短刀が知られておりますが太刀は珍しいかも知れませぬな」

刀剣には茎と呼ぶ部分があり、刀身の柄に収め固定する部位だが、刀工たちはそこに銘を切るのが習わしだった。

「ふうむ…。些か丸みを帯びた猪首の切つ先、姿が豪壮。

正しく愛染国俊の太刀と存じますが、このような貴重な一振りをそれがしが頂戴するわけにはいきませぬ」

目釦を打ち、本身を鞘に収めながら春貞は辞退した。

「は…だつ」

「はつ」

（そちは上様より生殺与奪の命を受けたただひとりの武士という。そしてな、父曰く、そちは徳川の守り神じやと…。

愛染明王は仏の教えに背くものを調伏する尊格で軍神。

それに相応しい一振りぞ。

これからもな、父を、そして余を守つてくれ）

と破顔した。

春貞は平伏し受けるしかなかつた。

なお、現在国俊の銘がある愛染明王は短刀しか伝わっていない。

家重が嬉々とした姿で客間を後にすると大岡は振り返りながら、

「上様が春貞さまに登城を命じようというお話しをされたとき、たまたまお側にいらした家重さまはよい機会と思われたのでしょう。ご自分が伝えに行くと言ひ張つて聞かないでの上様も苦笑されておりました」
と頭を下げた。

文月（七月）十日の朝がきた。

春貞は横手富三郎を伴として登城した。格左衛門と万之助はたまたまその前後に

出稽古の予定が入っていたからだ。

相変わらず越後屋で徳川紋の入つた袴に着替え、春貞は用意された乗物に乗り込んだ。

陸尺も馴染みの者を越後屋の隠居三井高房が揃えてくれていた。

「春貞さま。僭越でございますが、本日は深刻なお話しへの登城でございますか」

高房が些か心配顔で聞いた。

「俺にとつては深刻でもねえが上様にとつては大いに深刻な話しだぜ。多分お世継ぎのお話だと思うでな」

春貞がそう答えると、

「上様ならずとも、手前どものような商家でも跡取りの問題は様々な遺恨を残したり商売に大きな影響を与えます。

厄介なことでござりますよ人と申すものは……」
と応じた。

先代の高平から御店の事情を聞かされた事を思い出した春貞は、

「ああ、確かお前さんを紹介してくれた際に先代が愚痴を言つたことがあつたな

あ。越後屋さんくらいの大店になりやあそいらの大名以上の苦労があるだろ
う。
その点俺たちは気が楽でいいわさ」「
と機嫌良く答えた。

第四章 尾張への旅

一

その年の長月（九月）初め、春貞は尾張八代藩主徳川宗勝の要請を受けて尾張国に旅立つことになった。

春貞の本心はできることなら行きたくは無かつた。

確かに尾張は己の生国であつたが、十五歳の夏に乳母沙代と共に尾張徳川家御連枝の川田久保松平家を出て江戸で生きることを決めた以来戻つたことはないし興味もなかつた。

ただひとつ実母の墓があつたことが気がかりだつたがその生母、弥生が実は熱田神社に密かに匿わっていた事を知り、米道格左衛門らの働きで無事屋敷に迎えることが出来たこともあつて気がかりも無くなつていた。

しかし幼い頃から弟のようにして育つた代五郎（宗勝）の行く末は気になつてい

た。その宗勝から是非一度尾張に滞在して欲しいとの強い要望を受け、（参勤）交代の際、一緒に尾張へ来て欲しいと言っていた。

とはいえるその要請は春貞の都合すなわち奈美の出産や山田浅右衛門吉時の葬儀などで応じることができなかつたし将軍吉宗は春貞が江戸を長期に離れることに難色を示したため実現しなかつた。

さらに加えれば宗勝が八代藩主となり尾張も平静を保つてゐるがかつて尾張の忍びたちに春貞らが襲われた事実は忘れられなかつた。

もし万一火種が少しでも燻つてゐるなら、敵対勢力が存在するなら、彼らを悪戯に刺激することになる……。

「春さん。ということは上様のご許可が出たということですね」

格左衛門が夕餉の前の一時に問うた。

「うむ。そういうことだが最長でも尾張滞在は二ヶ月を超えてはならぬとの仰せだ」

春貞は苦笑いしながら、

「それにな、宗勝の殿には悪いが正直俺はあまり気が乗らないのだ」と呟いた。

春貞は先日登城した際の吉宗との会話を思い出していた。

「春貞。ついでといつては語弊があるが、このこと内密に事を運んでくれ。お主の動向を探っている者がいるやも知れず直前まで誰にも知らせるな…」

吉宗はそう念を押し春貞にひとつ密命を課したのだつた。

「やはり気が進まん」

春貞は両腕を頭の後ろに組んで寝転んだ。

そのとき茶を運んで来た幸江が、

「それでは私が名代として向かいましょうか」と冗談を言つた。

「おう、是非…と言いたいところだが、先日登城した折りに上様から密命を受けたな、どうしても向かわなければならなくなつた。

余計に気が進まなくなつたのはそのせいよ」

春貞がそう言うと田宮助左衛門が、

「密命ですと…。それは穏やかではございませぬな

と湯飲みを盆に置いて言い切つた。

「密命ということなのでな、お主たちにもまだ聞かせるわけにはいかねえが厄介

なことになりそうなのだ」

春貞は天井を見つめながら愚痴を言つた。

堀田万之助がすっかり大きくなつた道之助を膝に乗せながら、
「春貞さま。いつご出立されるおつもりですか」

というと格左衛門が、

「旅には供も必要じや。また俺がご一緒しようかな春さん」
横に座す夏穂の顔色を伺いながら言つた。

「そうよなあ。行かなくてはならぬなら早く立ち早く戻つてきたい。
特に支度も必要ないで、来週にでも旅立つか։。
それにな一緒に行つてもらう者はすでに考えておる」
春貞が言うと一同が春貞を注意した。

「夏穂と静香、そしてな富三郎に頼もうぞ」

すでに考えていたようで春貞は三人の名をすらすらと口に出した。
ただし口には出さなかつたが佐吉に影護衛を命じていたのだつた。
夏穂の表情がぱあつと明るくなつたが、

「それではそれがしは落選か」

格左衛門が不満顔で口にした。

「格左。俺の尾張行きはお前たち夫婦に出向いてもらつたときと比べて特別何をしなければならぬというものではない。

まあ密命を別にしての話しだがな。

それに承知のようにこの屋敷もいつまた攻撃に遭うかも知れぬ。

その時には格左、お前が幸江や万之助らでここを守つてもらわなければならぬ。道之助はもとより吉太郎という子もいるでな。

留守役も大役ぞ、格左」

春貞は起き上がりつてそう言つた。

格左衛門は大きく頷いたが、そのとき富三郎が、

「それがし、お供をするのは光榮なれどお役に立ちますかな」と少々自信のない物言いをした。

春貞は、

「富三郎は西国を回つておつたと聞いたがどのあたりの土地に詳しいか」と問うと富三郎は、

「春貞さま。言い訳がましいですが、確かに西国をあちこち歩きましたが残念

な事に物見遊山の余裕はございませんんだ。したがつて旅の楽しさなど微塵もございませぬので良い覚えなどあまりございませんな。

ただ大坂、無論名古屋は剣術道場も多かつたので詳しくなりましたし唯一懐が多少温かいときには京都にも足を伸ばしましたので些か詳しいですな

遠くを見るような眼でそう言うと夏穂が、

「京都には道場などありそもそもございませんね」と問うた。

「確かに大阪、名古屋というわけにはまいりませぬが夏穂さん、それがしほ短い間でしたが鞍馬に入りましてな、修験者修行の真似事をやりましたので」富三郎はこれまで口にしなかつたことを言い出した。

「天狗さまになる修行でございましたか」

思わず弥生が言うと一同に笑顔が生まれた。

「いや、それがしの鼻はこのとおり丸く天狗には到底なれませんんだ」

富三郎が戯けると大きな笑いが生まれた。

「大坂、名古屋、京都か。その辺りを存じておれば富三郎、十分じや。頼りにしておるぞ」

春貞が真顔でいうと、

「ははつ」

横手富三郎が武士の顔になり頭を下げた。

「ところで笙船先生⋮」

春貞が話柄を変えた。

「ううん⋮すまん。居眠りしていたようじや」

些か疲れたのか、小川笙船が苦笑いしながら応じると春貞は、

「先生、土産用として相変わらずですが畠の高麗人参を⋮そうですな、五包み見
繕つていただけませぬか」

と頼んだ。

笙船は、

「容易い御用だ春さん。留吉さんにまた桐箱を用意してもらおうぞ」

そう言いながら座り直した。

「五つとはまた⋮」

格左衛門が不思議な顔をすると春貞は、

「うちひとつはお前ら夫婦と母上たちが世話になつた雲助宿の親分に礼を言いに

立ち寄ろうと思つてな：」

「そう言い終わらないうちに、

「それはよい。春さんそれは嬉しい。

是非是非よろしく言つてくれ」

と頭を下げた。

「ほう、またあの松谷久四郎どのにお会い出来ますか」

富三郎も破顔した。

「それから格左、尾張：名古屋は俺にとつて最後の機会になるやもしれぬ。

長い間の念願だつた札差近江屋と両替商井筒屋の主人たちにも挨拶しようと思つてな」

春貞はまた畳に仰向けになつた。

ということで、翌週春貞らは尾張を目指して早朝に旅立つた。

腰には父徳川綱誠の形見である栗田口吉光作だと伝えられる脇差しと吉宗から授かつた徳川葵紋揃いの一振りがあつた。

「幸江、後をたのむぞ」

「おまかせを」

「理子、母を頼むぞ。

格左、万之助、助左衛門：皆と診療所を頼んだぞ」

「お任せあれ。お気をつけて」

門前には弥生と友子、小川笙船、井之上新界とおよしをはじめ一同が見送り、春貞、夏穂、静香そして富三郎の四人は旅支度で屋敷を後にした。勿論佐吉が影護衛として同行することは皆承知のことだつた。

「夏穂。お前は二度目の尾張となるが、近江屋や井筒屋に面識があるのはお前だけだ。

色々と助けて貰うことになるが頼むぞ」

春貞は留吉の操る舟で大川を渡りながら言つた。

「はい。前回の旅は元文五年（一七四〇年）十月も末の頃でしたが早四年ぶりです父上。

また前回は初めての長旅ということで格左衛門さまや留吉さんに多々迷惑をかけましたが今回は大丈夫です」

と留吉に笑顔を送りながら答えた。

「そうだ、留吉。義歯は相変わらず注文が入っているのか」

春貞が問うと、

「はい。しかし先生方が正式な注文を受けるのは慎重になさっていますのでしが特に忙しい仕儀にはなつてませんや。

ただ静香さんがお留守になるのが義歯だけでなく診療所にとつて大変でございますよ」

留吉がそういうと静香は顔を横に振つたが、義歯の荒削り作業を静香が担当していただけなく、向島診療所が混雑するときには主に静香が手伝つていたからだ。

「そういえば静香は長旅は初めてか」

春貞が問うた。

「はい。足には少々自信を持つていましたが、先般夏穂さまに当時のお話しを伺い、些か心配になつて いるところです」

と静香が答えた。

「まあ、夏穂さまにも申し上げたことがあります、足のマメは慣れないことは防ぎようがございません。」

先生らにいただいた薬をこまめに塗ることが肝心でしようかな」

留吉が言い切つた。

大川を渡りきり、舟を下りた春貞は、

「留吉。屋敷を頼んだぞ」

と言い、背を向けた。

その背に留吉は深々と頭を下げ、

「お気をつけて」

と叫んだ。

「ところで富三郎。少し詳しく教えてくれ」

春貞が歩きながら呼び掛けた。

「はつ。なんなりと」

緊張気味の横手富三郎に春貞は、

「東海道は何度ほど行き来しているのかい」と聞いた。

「江戸に足を向けたのは格左衛門どのを頼つたのが初めてでしたが、箱根あたりと京都の間なら四、五度といったところでしようか」

「うむ。で、先に京都にも詳しいと聞いたが⋮」

「はい。まあ大体の地の利程度は承知しておりますが、何しろ物見遊山の旅はでさせなんだ。為に美味しい物を食べさせるところへ連れて行けと言われてもそれは無理でございますぞ」

富三郎は丸い顔をさらに丸くして笑つた。

「富三郎。夏穂、静香も聞いてくれ。俺は上様から密命を託されていると申した⋮」

「はい」

「だからしてまだ詳しいことは言えぬが、宗勝さまと別れた後に数日京都に行かねばならぬ。

ただし承知しておいて欲しいが、俺は京都を全く知らぬでな、富三郎……お主を当てにしているので頼むぞ」と破顔した。

「承知しました。まあどこにどのような神社仏閣があるか程度はご案内できると思します」

富三郎が言うと、

「以前な、長兵衛さんが京都本店に行かれるとき俺たちもそのうち幸江や理子を連れて京都に旅したいと話したことがあつた……」

しかしそんな悠長な旅が出来るのはいつのことよなあ」

春貞は青空を仰ぎながら呟いた。

「私たちも京都にご一緒できるのですね」

夏穂が嬉しそうに静香の手を握った。

「一緒に行くのはいいだろう。但し、何をどうするかはその時になつて話すことにしてよう」

春貞たちは軽快な足取りでまずは保土ヶ谷宿ないしは戸塚宿を目指した。

「どうだ。夏穂、静香。足の具合は」

春貞は一人に気遣つたが、

「父上、大丈夫です」

「今のところ大事ございません」

という二人の返事だつた。

結局その日は川崎宿の万年屋で名物だという「奈良茶飯」（茶飯に豆腐汁、煮

豆）に舌つつみをうち、保土ヶ谷宿で一泊することになった。

そして二日目は小磯で昼餉と共に一休みし小田原で泊まることになった。

三

その頃、向島では夕餉の前の一時、一同が居間で一息入れていた。

「しかし、それがしがこの屋敷に来てから春さんが二ヶ月とか三ヶ月と長きに渡り留守にされるのは初めてだからどうにも勝手が違いますな」

米道格左衛門が茶を飲みながら呟いた。

「さよう。まあ春貞さまのこと、何も心配はいりませぬが、今頃は小田原泊りと
いつたところでしような」

堀田万之助が応じた。

春貞の実母弥生が思い出したように、

「とは申しても私が尾張から江戸まで駕籠で運んでいただきましたがその間二度
でしたか、野武士や山賊といった者達に襲われました。
今回は夏穂さんと静香さんといった女子衆二人連れでござりますから悪い者達に
目をつけられなければよろしいのですが」

と心配顔でいうと小川笙船が、

「大奥さま。襲つた奴らはきっと後悔いたしましようぞ。

何しろ夏穂さんは剣の遣い手、そして静香さんは弥三郎さんの直弟子ですからの
う」と笑つた。

「確かに、確かに」

田宮助左衛門と弥生が顔を見合わせて笑つた。

「そういえば先生方、診療所はいかがでございましたかな」

助左衛門が笠船と井之上新界、そしておよしを見回して問うた。

新界が、

「水害の後遺症といった患者はほんといなくなりましたが、風邪と腹痛、そして怪我で来所する子供たちが相変わらず多いです。

またこれまた相変わらずですが、義歯の問い合わせや注文が来ております。しかし荒削りをやってくれている静香さんが留守ですし留吉さんばかりに負担がかからわけでかなりの待ちをいただいております」

というと吉太郎を膝に乗せ揺すりながら留吉は、

「先日来のご注文は明日にでも終わりましょう。

先生方が宜しければ次の注文に移つてもあつしは大丈夫ですぜ」と応じた。

「しかし、歯で難儀をしている人が多いとは想像できましたが、これほどとは思いませんでした」

およしは夫、新界に視線を送った。

「過日私自身の部分義歯をお作りいただきました。

世辞ではなくこれほど違和感なく物が噛めるとは…。

やはり向島診療所の義歯の良さが口づてに拡がるのは当然でございますな」

弥生が言い切つた。

そのとき、

「ごめんくださいやし」

と声がした。

留吉が飛び出てみると久しぶりに須田町の岡つ引き岩次郎がなんと女房の梅と一緒に立っていた。

「親分。お久しぶりですな、いかがされましたか」

留吉が問うている後ろから助左衛門が出て来て、

「おお、親分さんお揃いですか。

ふむ、ちょうどよい所にお見えになつた。まずはお上がりください」

と皆のいる居間に案内した。

岩次郎夫婦は留吉と奈美の仲人でもあつたから皆よく知つてはいたが、これまで梅が仲人以外で屋敷に姿を見せたことはなかつた。

「これはこれはご夫婦でお珍しい。

ちょうどこれから夕餉でございますので是非ご一緒に膳を囲んでくだされ」

幸江に言われた岩次郎は恐縮の態で、

「これは不調法な時刻にお邪魔をして申し訳ありませんでした。

この先にちよいと用事があり女房と出かけましたが、そういえばすぐ先は春貞さまのお屋敷、ご挨拶していきたいとこいつが五月蠅いのですから…」

頭を搔きながら岩次郎が言い訳がましいことを言うと、

「お前さんはいつでもこちらさまに伺えるからいいけどさ、あたしはなかなか機会がないものだから…」

とこちらも言い訳を口にした。

「いいじやあございませぬか、理由はともかくよくおいでなさいました。賑やかなのは嬉しいことでござりますよ」

弥生も破顔しながら空いている場所に座るよう促した。

「へい、恐れ入ります。

そういうえば旦那の…春貞さまのお姿が見えませんがお出かけでございましたか

岩次郎が目ざとく隣の格左衛門に問うた。

「うむ、留守であることは確かだが、何と申したら良いかのう」と戸惑っていると弥生が、

「親分さん。息子はとある用事で尾張に旅立つたところで、そうですね、戻るには二か月と少しかかるのではないかと思います」

と当たり障りの無い説明をした。

「そうでしたかい。江戸に旦那がいないとなれば寂しいですね」

岩次郎は本当に寂しそうな顔をしたので小川笙船が苦笑しながらも、

「親分さんや、春さんが江戸を留守にしている間、しつかりとお江戸を守つていただかねばなりませんぞ」

と鼓舞すると岩次郎は女房の梅共々がくがくと頷いた。

四

小田原宿を発つた春貞一行はまずまずの天氣にも恵まれたし夏穂と静香も足にマメができたものの大事なく歩いていた。

左手に日本橋より十九里目を示す小八幡の一里塚を眺めつつ少し進むと横手富三

郎が右手を指さし、

「あれが八幡山神明院ですぞ。

確か弘法大師さま筆跡の碑がございますそうな…」

と口にした途端足が止まつた。

「春貞さま。出ましたな」

「夏穂、静香油断するな」

春貞は言いつつ笠を上げると松並木が深くなる当たりに十人ほどの人影が見えた。

「父上、弓を引く気配がいたします」

夏穂が言いつつ鯉口を切ると静香も懐に右手を入れた。

「どうやらただの物取りではなさそうだな富三郎」

「のようですね。」

となれば老中筆頭あたりの差し金でしようかな

「ふむ。江戸を離れればやりやすくなると思つたのだろうよ」

そんな呟きをしながら一行は歩みを続けた。

「いいか。ここまで追つてきて待ちぶせするとは周到な計画だと思わざるを得ま

い。ぬかるなよ」

春貞は念を押した。

とそのとき、

「ヒュン、ヒュン」

と音がした刹那、松林の両側から雨のように矢が飛んできた。

春貞らは拔刀し、飛んでくる矢を斬り捨てながら松林に向かつて走った。と同時に静香が音もなく松林の中に消えたと思つたら、

「ぎやあ」

「わあああ」

と悲鳴が多く上がり、弓を持つた侍が六人転がり出てきたが、皆顔や首に鉄のつぶてがめり込んでいた。

弓を躊躇されたと思つたか、今度は抜刀した男たちが走ってきたが春貞たちの腕を知らぬ余りにも無謀な攻撃だつた。

春貞と富三郎があつと言う間に五人の胴を抜き、夏穂が一人の手足を断ちきり一人の肩を突き刺した。

その瞬間春貞は、

「火縄の臭いだ。伏せろ」と叫んだとき、

「ダーン、ドーン」と乾いた音がして火縄銃を抱えた一人が松の枝から落ちてきた。

「おう、佐吉。助かつたぜ」

春貞が姿勢を低くしながら声を出すと、

「鉄砲は二挺だけです」

と佐吉がふわりと姿を現した。

「鉄砲の一人は静香さんが仕留めましたぜ」

佐吉が満足そうな声を上げるとそれを合図としたように上空から静香も降りてきた。

そのとき、今まで姿を見せなかつた大柄の男が春貞たちの前に立ちはだかつた。

「誰の差し金かは見当つくが、すでにお主らは負け戦よ。

命を粗末にしねえで帰りな

春貞がいうと男は、

「金で雇われたとは言えそれがしにも武士としての面目がござる。首尾良くこと
が成就すれば召し抱えてもらえる約束もあるしな…。

松平春貞とやら、尋常に勝負せよ」

と抜刀した。

「笑わすねえ。

散々飛び道具を仕掛け、大人数で待ちぶせしておいて今更尋常にだと…。
ふん、まあいいだろう。

閻魔への土産に一手お相手いたそうか。

みんな、手を出すんじやあねえぞ」

春貞もすらりと剣を抜いた。

そのとき、春貞の鍔を飾っている金象眼がきらりと光り葵紋が浮き上がった。
それを見た男が、

「その紋は…。お主は何者か」

と驚愕しつつも間合いを図るかのように下段に構えた剣を次第に中段、そして上
段に構え直した。

春貞はといえば青眼に構えて静かに立っていた。

草鞋が砂利を踏みしめる音がしてじりじりと生き死にの間合いに入つた刹那、男は大上段のままに春貞めがけて斬り結んだ。

思わず静香は「ああっ」と声を上げたとき、刃を寸毫避けつつ男の正面に春貞は体を寄せていた。

と見ると春貞の剣が心の臓に真っ直ぐ突き刺さっていた。

いつ動いたのか？。

一同は信じられないものを見て驚愕していたが、春貞が体を外しながら剣を抜くと男は血しぶきと共にドウと崩れ落ちた。

「ち、父上。

いまの技は…どのような技なのですか。

父上の動きがまったく見えませんでした」

夏穂も興奮の態で愛刀を納めながら声を上げた。

横手富三郎も、ふうつと息を吐きながら、

「眼福を得ましたぞ」

と破顔した。

佐吉は、

「春貞さま。少なくとも箱根の宿場あたりまでは今のところ不審な者はおらない
と思います。

「旅をお続け下さい」

そう言い残してふつと姿を消した。

「佐吉、ありがとうございますよ」

松林の中で春貞が声を上げた。

草鞋を結び直した一行は何ごとも無かつたかのように歩き始めた。

「春貞さま。

やはり老中松平乗邑様の手の者でございますかな」

富三郎は顔を前方に向けたまま問うた。

「そうよなあ。

いつも言つてるが、俺たちにしてもそういう敵はいねえ。

尾張との戦いはすでに終息したはずだし、見ての通り今の奴らは物取りではなく
俺たちがここを通ることを知り待ちぶせしていたに違えねえ。

だとすれば、江戸ではさすがに大がかりなことはできねえが、旅の途中なら無頼

漢にやられたなど、いかようにも物語が描けるからな。

それにいまの奴はことが成就したら召し抱えられるとか言つておつたな」
春貞が答えると、

「ということは春貞さま。これからもまだ同じ事が有り得るということになりま
すね」

静香が思わず呟いた。

「うむ、乗邑は当然俺たちが尾張へいつ向かうかなど十分知つておろう。
老中としては俺たちが江戸御府内から出た好機を逃すまいといくつか手を打つて
いるかも知れぬな。

ただし密命を知つてのことか、あるいは単に俺の命を奪うつもりだつたか…」

春貞が呟くと、

「父上。

父上は畏れ多くも尾張藩主宗勝さまの求めに応じ、上様のご許可を得て旅をされ
ております。

また内容はまだお聞きしておりませぬがいまのお話…上様から密命を託された
父上に狼藉を働く張本人が時の老中だとすればこれは捨て置けませぬ。

僭越ですが、是非上様にお知らせすべき出来事だと思います」

夏穂は熱弁を振るつた。

横手富三郎も、

「それがしも夏穂さまの申される通りと考えますぞ。
なにしろ、春貞さまのお命を奪おうとする原因が密命にあるとすれば、それは上
様に刃を向けるのと同じ事でござりますからな」
と言い切つた。

「わかつた。宿についたら文を書き、佐吉に託せば安全確実に上様のお手元に届
くであろう」

春貞も覚悟を決めたようだ。

「春貞さま。佐吉さんとはいつでも繋ぎができるのでござりますか」

静香が問うと、

「うむ。影護衛としていつも我らに注視してくれていると思え」

春貞は静かに笑顔を返した。

「時間を取られたがまだ日が高い。

足が大丈夫ならこのまま箱根を越えて三島に向かいたい」

春貞が言うと、

「ああ、雲助宿に向かわれるんですね」
夏穂が嬉しそうに声を上げた。

五

箱根は一番の難所だつたが天候にも恵まれ関所においても大きな問題もなく峠の茶屋で軽い昼餉と共に足を休ませてゆつくり歩き始めた
と、春貞が粋な小唄を口にし始めた。

「腹の立つときや 茶碗で飲みな」

呑めどく呑めぬ

呑めぬ酒なら助けてもやろが
厭なら醉興なうおかしやんせ

おつとそこらが口説の種となるゞ」

「父上、何の唄でござりますか」

夏穂が問うと春貞は、

「何といつたか：情痴物の替え歌よ。

夏穂は覚えなくてよいわ。

あまりに気分が良いので久しぶりに思い出しただけだ」と笑った。

「そういえば…父上は昔、小唄をお習いだつたと母上からお聞きしたことがあります」

夏穂が言うと、

「そうそう。幸江を連れて行つたこともあつたが、師匠はどうされておるか。

よい女だつたぞ」

春貞が戯けると夏穂が怒つて春貞の袖を引っ張つた。

「春貞さま。そろそろ一里塚が見えますが、日本橋よりちょうど二十六里目になりますぞ」

富三郎が指を差して説明した。

「そうか。ということはこの先を越えればやつと二島だな」

春貞が富三郎の指さす方向を眺めながら呟いた。

「はい。後一里半ほどで松谷久四郎どのの屋敷でございますぞ」

富三郎が破顔した。

そのとき前方から空籠が一丁軽快に進んできたが先棒の男の足がピタリと止まつた。

「おやまあ。横手の旦那ではござりますまいか」

富三郎の姿を見て笑顔を送ったとき、前歯が欠けているのを夏穂が目ざとく見つけ、

「嗚呼、権蔵さんではございませぬか」と声を上げた。

「おお、貴方さまは確か…そう、夏穂さまですな。なぜにこんなところに」

ふと後ろに春貞がにこにこして立っているのに気づいた権蔵は、「あんれまあ。向島の殿さまじやあ」

と声を上げ、後棒の相棒を促しその場に片膝を立てて座し頭を下げた。

権蔵は春貞の母弥生を駕籠に乗せ、向島の屋敷に運んだ後に屋敷で一泊したことがあつたから春貞の顔を知っていたのだつた。

「権蔵さん。俺はただの素浪人じや、頭を上げなされ」

春貞はそう言いながら、

「申すまでもないが、松谷久四郎どのの屋敷にお連れいただけまいか」と願つた。

「いやあ、親分が：いや頭が喜ぶで。

なにしろ酒が入る…といつても毎日酒浸りだがなあ、格左衛門さんや夏穂さんのお話しが必ず出るんでわしらは耳蝸ですわ。

年取ると同じ事ばかり繰り返しますでなあ…。

あつ、これは失言」

権蔵はそう言つた後、

「だどもよ、頭は最近体の具合が悪くてな、横になつていることが多くなりわしらは心配しているんじや横手さま」

富三郎に向かい権蔵は悲しそうな顔をした。

「いかがされたのか」

富三郎が問うと、

「酒、酒、酒のせいだよ旦那。

いくら好きでもさ、ああ飲んでは胃の腑もおかしくなつちまうでな」

権蔵が吐き捨てるようになづいた。

「まあそれはそれとしてだ、雲助宿までには一里ほどあるからよ。どうですそこのお嬢さま、空籠じやあ景気も出ねえから乗らんかな。

いや、駕籠賃はいただかんからよ」

と静香に向かつて愛想を振りまいた。

「いえ、わたしは……」

と腰が引けた静香に春貞は、

「これも経験よ。

静香、遠慮無く乗せてもらえ」

柔やかに命じ、静香も初めての駕籠に恐る恐る乗り込んだ。

「さて、発ちますぞ」

相方に目配せした権蔵は静香を乗せた駕籠を軽々と担ぎ、見事な喉で箱根駕籠昇

唄を謳いながら進んだ。

竹にナ－なりたや（ヤレ　ヤレー）箱根の竹に
諸国ナ－大名の

杖竹にナア－エ（ヘツチヨイ　ヘツチヨイ）

松になりたや　箱根の松に　諸国大名の日除け松
咲いて見事な小田原躊躇つづじ　もとは箱根の山育ち
箱根御番所と荒井がなけりや　連れて逃げましよ上方へ

長の道中雨には降られ　思い出しますふたおや両親を

笠を忘れた箱根の茶屋に　空が曇れば思い出す
ここは峠の甘酒茶屋よ　東下りを思い出す

三島照る照る小田原曇るあい　間の関所は雨が降る
晩の泊まりは箱根か三島　但し問屋場雲助宿よ

権蔵らの歌声は三島の空に心地よく響いた。

「よい唄ですね、父上」

夏穂が思わず声をあげた。

箱根駕籠昇唄は藩政時代、雲助と呼ばれた荷物運搬や駕籠昇人足が箱根八里の街道筋で歌つた唄だ。時に「箱根長持唄」ともいわれるらしいが、駕籠を昇ぐときには歌えば「駕籠昇唄」なのだ。

この箱根駕籠昇唄はより知られている馬子唄と共に人々の口から口へと広まった。

なお近代まで嫁取・婿入のご祝儀唄として全国的に歌われた「長持唄」は、皆この「雲助唄」に源を発したものだという。

「ふむ。権蔵さん、最後の（但し問屋場雲助宿よ）は我らの為に文句を変えてくださつたか」

富三郎が破顔して声をかけると権蔵は、

「おつと、分かつていただけると嬉しいね旦那」

とニッと笑うと欠けた前歯が目立つた。

ちなみにその部位の元の詩は「湯本の福住か」であつたがこれから春貞らが向か

う雲助宿に因み即興で変えたのだつた。

駕籠の歩みにつられてあつと言う間に円明寺南に位置し、問屋場北側にある農家風の建物に到着した。

ただし夏穂や格左衛門が滯在した際に野武士たちに襲われ全焼したために建て替えになつていたが、印象はほとんど変わりがなかつた。

「さあさ、着きましたぜ」

静香の草鞋を揃えた権蔵に春貞は子粒を握らせた。

「お、お殿さま。駕籠代はただと言つたはずですぜ」

と突き返そうとしたが、

「権蔵さん。それは駕籠賃ではなく案内料だ。

取つておけ」

と笑つた。

嬉しそうに頭を下げた権蔵は玄関で、

「お頭あ。お客様ですぜ。

江戸からお客様だよお」

大声を出しながら上がり框で草鞋を脱ぐのもどかしく奥へと走つて行つた。

しばらくすると権蔵の肩を借り、腰袍を着て一方の手に手作りと思われる杖をついた髭面の男が破顔して現れた。

月代も伸びてそれこそ雲助そのままのような出で立ちだつたが夏穂と富三郎の姿を認めると杖を放り出し、支えていた権蔵の腕を振り払つて玄関まで歩み、座した。

「嗚呼、横手どのと・奥方さま、そう夏穂さまと申されましたな。

命のある内にもう一度お会い出来るとは・・・」

そう絞り出すように言つた後、その背後にいる春貞に気づき、居住まいを正した。

「も、もしや、貴方さまは松平春貞さまでござりますまいか。

それがし・松谷久四郎でござる」

と不自由な体で平伏した。

春貞は久四郎に近づき、その両手を取つて、

「さよう。松平春貞でござる。

その節はそれがしの母をはじめ米道格左衛門、夏穂、留吉らが大変お世話になり申した。

今般尾張に向かう途中でござるが、一言お礼を申し上げたく立ち寄らせていただ
きました」

と頭を下げるとき久四郎は泣き出した。

「ああ、ああ、親分：いやお頭が泣いてるよ。

だからさ、髭ぐらい剃れといつたんだよ。ひでえ顔だぜお頭つ」

権蔵ももらい泣きしつつ春貞らを客間に誘つた。

簡素だが掃除が行き届いている客間でしばし待つていると久四郎は急ぎ髭を落と
した姿で入ってきてあらためて春貞に平伏した。

「このようなところにわざわざお越しいただき恐縮の極みでござる」

久四郎の背筋が伸びていた。

「お体の具合がすぐれないとお聞きしましたが、いかがでござりまするか」

春貞が問うと、

「お恥ずかしい話し、酒の飲み過ぎでございましてな。しかしそれがしから酒を
取つては生き甲斐もなにもございませぬ。

雲助たちには面倒をかけておりますが、先も知れておりますので好きにさせても
らっております」

そう応じ、

「そういえば横手どの。お手前は向島のお屋敷に無事たどり着かれたのじやな」と問うた。

「はい。お陰様にて米道どのへの紹介状をいただきましたのでな。本当に助かりましてござります。

ご忠告を忘れたわけではございませんが、着いたその日に財布ごと盗まれましたな、春江館・米道どのが館長を務める道場でござるが、そこを頼つたというわけでして…」

横手富三郎が頭を下げる

「その横手どのが春貞さまと一緒に尾張に…でござりますか」

好奇心一杯の表情で問いかけた。

「西国をあてもなくさ迷つておりましたそれがしでござつたが、以前文をお出し
いたしました通り、ご紹介をいただきました春貞さまのお屋敷でご奉公させていた
ただくことになりました、この度は伴を命じられました」と鬚に手を当てながら答えた。

「それはよい、それはよかつたですな。

それがしも十年若かつたらお屋敷に伺い、ご一緒に稽古をさせていただきとうござつた」

久四郎は破顔しながらもふと寂しそうな表情に変わつた。

そしてすぐに静香に顔を向けた。

「そういえば夏穂さまの腕前はこの久四郎、よく存じ上げておりますがお嬢さまもどこか不思議なお方でございますな」と笑顔のまま首を傾げた。

「静香と申します。どうぞお見知りおきください」

静香が頭を下げながら言うと、

「ご丁寧に、松谷久四郎でござる。

そう：春貞さま、今夜はここでお泊まり願えませぬか。せめて一晩、語り明かしたく存ずる

と頭を下げた。

春貞は、

「そう願えれば助かります」

即座に願つた。そして、

静香が背負つていた荷物の中から包金二十五両と風呂敷包みをひとつ取り出し久四郎の前に差しだした。

「土産の真似事でござるが、こちらは我が屋敷の畑で育つた高麗人参でござる。そもそもが上様からお裾分けいただいた物ですが、土が合つたのかよい出来だと聞きました。

滋養強壯にもよろしいと思いますのでご笑納願いたい」

春貞が風呂敷包みを開くと桐箱が表れ、土とつーんとした独特の臭いがした。

「これはこれは、なによりのものがあります。」

遠慮のう頂戴いたしましようぞ。これでまたまた酒が飲めますかな」

久四郎は自虐的な笑いを浮かべて頭を下げた後、

「余計な事であればお叱りいただきたいが、尾張へは物見遊山ではございませぬな」と聞いた。

春貞は女衆が運んで来た茶に頭を下げつつ、

「実はあまり気が進まぬ旅でございましてな…」

言いかけるとその意を汲んだ富三郎が、

「我らはどのような仕儀となるか、存じておりませぬが藩主宗勝さまのたつての願いで春貞さまは一ヶ月ほど尾張に滞在することになるようです」

隣の夏穂と頷きあいながら話すと、

「さよう。それがしは十五のときに尾張を捨てた男。

お陰様にて死んだと思っていた母とも再会でき、いまさら尾張には何の未練も興味もございませんが、殿は子供の時には一緒に悪さをした仲。頼られますとなかなか断れませんでな」

春貞は苦笑しながら答えた。

「とすれば春貞さま。帰路にはまたお立ち寄りくださいますな」

久四郎は嬉しそうに願った。

「そうなりますな。

またご厄介になるかと思いますが、宜しくお願ひ申す」

春貞も笑顔で答えた。

その後、質素ではあつたが美味しい夕餉を馳走になつた春貞らの膳には酒が乗つていたものの久四郎は珍しく酒を飲まなかつた。
ひととき歓談した後に久四郎が、

「春貞さまに願うのはいかにも畏れ多いので横手どのあるいは夏穂さまと一手立ち会わせていただけまいか」と願つた。

なるほど為に酒を飲まなかつたのかと春貞は思つたが久四郎は、

「以前米道どのがいらした際に雲助さんにご教授いただいたことがござつたが、それを機会にこの裏にあつた古い建屋を道場に見立てて稽古をするようになりますな、まだまだ素人の域を出ませぬが腹ごなしにお相手をお願いできませぬか。彼らにとつてもよき思い出になろうかと思いますのでな」と話した。

春貞は、

「承知した。喜んでお相手いたしましようぞ」

と富三郎、夏穂そして静香と顔を合わせながら笑顔で答えた。
権蔵の肩を借りながら久四郎が案内し、春貞らは母屋から少し奥まつた場所にある古い建物に入つた。

百畳あまりで剣術道場としては狭いが天井は高く、そこではすでに十数人が竹刀や木刀を振つていた。

「佐川太一、ここに…」

久四郎が声を上げると歳の頃なら三十ほどか、髭面の男が近づき畏まつて頭を下げた。

「春貞さま。佐川太一といいますが、それがしの補佐をしてくれております。われらの仲では腕も立つし人物も良し…。

それがしの後継にと説得しているところです。

ただしそれがし同様、本人のたつての希望で昔使えていた藩名などはご容赦を」と紹介した。

佐川と呼ばれた男は春貞の前に座して頭を下げ、

「佐川です。よしなに…」

と口数少なく挨拶した。

「松平春貞でござる。

こちらから横手富三郎…ふむ、すでにござ存じでしたかな、そしてそれがしの養女夏穂と静香でござる」

春貞は丁寧に紹介した。そして、

「佐川どのは失礼ながら剣の腕前はなかなかのものと存ずるが、松谷どのの勧め

もありお手合わせをさせていただきましょう」と笑顔で言うと太一は初めて破顔して頷いた。

春貞らが道場に入つたことを聞き及んだのか、三十人ばかりが興味津々の態で集まってきた。

見所のつもりなのだろう、木箱を置き一段高くなっている場所にどかりと座した久四郎は、

「本来ならそれがしが春貞さまと竹刀を交えてみたいのじやがこの体ではなんともしがたい。

太一、敵うお相手ではないがよき思い出となるであろう。一手ご指南いただけ」と声を上げた。

「はつ」

太一は竹刀を持ち、道場中央付近に正座し春貞に頭を下げた。

「佐川どの、そしてご一同」

春貞は道場の板壁に座した雲助たちに向かつて、

「それがしは物心ついた頃より尾張柳生新陰流を身につけてきました。

侍達はとかく己の流儀に執着が強いようだが、それがしは剣を学ぶのに柳生新陰流でなくてはならぬと考えたことはござらん。

事実、そこなる横手富三郎は無外流だし、養女の夏穂は基礎こそ新陰流ではあるものの、もともと商家の娘ゆえ己の長所を伸ばし、今では独自の剣を身に纏つておる。

また我が屋敷には中条流の者もいる。

さらにそちらの静香は剣はまだまだ修行中なれど師匠が公儀御庭番であつたこともあり、走り、飛び、火薬の扱いから飛び道具、目くらましの術などそれがしたちには持ち合わせていない武術で役に立つてくれている。

さてこれからお手合わせさせていただくが、これは指南というより座興とお考えくだされ。

以前それがしの右腕である米道格左衛門が明言したそうだが、強いとはどういうことなのか、勝負に勝つということはどういうことなのかの一端を感じていただければ良いと思う

春貞は小袖に首巻き姿のまま無腰で佐川太一の前に立つた。
「佐川どの。これはお主を軽んじてのことではない。

柳生新陰流の奥義のひとつに無刀取りという技がある事をどこかで耳にされたかと思うが、思い通りに事が運ぶかはともかくまずは無腰でお相手つかまつる」

そう春貞が宣言すると道場内にピーンと緊張感が高まつた。

佐川太一はさすがに緊張の色は隠せず、青眼に構えた竹刀をすぐに下段に変え、さらに上段に振りかぶつた。

一方、春貞はただただ両手を下げ立つてゐるよう思えたし肩に力が入つてゐるとも思えなかつた。

間合いを見切ろうと太一が一步踏み込んだとき、春貞が外すどころかすつと間合ひを縮めた。

「えいっ」

頃合いと裂帛の気合いで太一が切り込んだ。

切つ先が春貞の肩を碎くかに思えた刹那、太一は闇の中にいた。

見所に座した久四郎が見たものはわずかに腰を屈めた春貞の姿と太一の体が宙を舞い床に落ちたことだつた。

そして太一の竹刀はなんと春貞の手にあつた。

とある西国の剣術指南役だつた松谷久四郎にして春貞が腰を屈めたところは目で

追えた。しかし太一が宙を舞う瞬間の技がどのようにしかけられたのかは見えなかつた。

「それまで。

お見事でござる春貞さま

春貞は笑みを浮かべながら太一に活を入れ抱き起こした。

気がついた太一はその場に座しながらも呆然として春貞を見上げていた。やはり自分がなぜ負けたのか、どうされたのかがまったく分からなかつたからだ。
しばらくしてやつと、

「ま、まいりました。ご教授ありがとうございました」

と声を絞り出した。

春貞も太一に頭を下げつつ、

「無刀の技といいつつ、こうした立ち会いをすると多くは誤解される。それは無刀は素手で相手の武器を奪う技だとな……。

無論、いま見ていただいたように結果としてそうなつたが、本来は己に武器がなくとも相手に斬られないよう、という技なのです」
一呼吸入れ、

「さて、お主たちは夏穂や横手とは相まみえた者も多いと聞いた。これまた剣の手合わせというより座興とお考えくだされ。

ただし、世の中には思いもよらぬ技を使う者もいるということを知つていただけたらと思う。

静香、お相手をせい

春貞は声をかけた。

「はい」

即答した静香が無腰で道場中央に立つと、

「そうよなあ。そちらに座している、そう…おののおの方。六人、静香とお立ち会い願いましょうぞ」と声をかけた。

六人の雲助たちは期待半分、畏れ半分でそれぞれ竹刀を持つて静香から三間ほど離れて静香を取り囲んだ。

「なるべく怪我がないようと願うが、些か手荒な仕儀となるやも知れぬ。ともかく六人で手加減せず静香を叩きつぶすつもりで向かつてみよ」

春貞が命じた。

「おう」

と声を合わせた六人が一斉に竹刀を構え、突進した。

そのとき、静香は恰に檻をかけ、右手を懷に入れただけの姿だったが、一同は不思議な光景を見た。

静香が右手を振り上げた刹那、ふわりと浮き上がり、正面の二人の体を裸足で蹴つたと思つたらすでに男たちの頭上を越えて二間程離れた床に立つていた。

先端に鉤がついた細縄を投げ、天井の横木に引つかけて飛び上がったのだ。後の四人が向きを変えて竹刀を振りかぶり、静香が後ずさりすると男たちが執拗に追い迫つた。

四人の切つ先が迫り、静香の背後は板壁。

四本の竹刀が思い思いの方向から叩きつけられたその刹那、またもや静香の体が飛ぶというより浮き上がり、あつと言う間に三人が蹴り倒された。

最後の一人が落ちてくるであろう静香に一撃を加えようとした瞬間、彼は攻撃を忘れ呆然と立ち尽くした。

なぜなら静香は床に落ちるのではなく、なんと板壁に足が吸い付いたように走つたと思つたら男の背後に飛び、細紐を首に絡めて絞め上げていた。

今は亡き弥三郎直伝の秘技だつた。

無論手加減していたから怪我は無かつたが六人の男たちは背筋を寒くして腰碎けとなつていた。

「お、おみごとでござる」

見所の久四郎が手を叩きながら思わず腰を浮かした。

久四郎や雲助たちだけでなく横手富三郎や夏穂も目を見張るほどの静香の技であった。

静香は雲助たちの呼吸が聞こえるほど静寂な道場中央に戻り、久四郎と春貞に頭を下げた後、元の席に座した。

興奮冷めやらぬ久四郎が静香に問うた。

「お屋敷の女子おなごたちは皆そうした技をお使いか」

笑顔に戻った静香は、

「いえ。わたしだけでございます。若奥さまは柳生新陰流の達人でいらっしゃいますし、夏穂さまはご承知の通りです。春貞さまのご長女理子さまも新陰流を学ばれていますが、あとのお方たちは武芸とはほとんどご縁がございません」

と答えた。

「ふむ。となれば静香さんはまさしくお屋敷の女忍びということでおござりますかな」

「いえ。私の師匠は春貞さまの軍師でいらっしゃいました公儀御庭番。その師匠から女忍びになるには歳がいきすぎていると笑われましてござります」

「ほう…では失礼ながらなぜそうした特別な技を伝授されるようになりましたのか」

松谷久四郎は興味新々に問い合わせた。

静香はその問いにすぐには答えず春貞を見た。

春貞は破顔しながら、

「静香は答えにくかろうと思ひますのでそれがしが…」

と、もともと静香は春貞の屋敷に忍び込み、刀剣類を盗もうとした女であつたことなどを簡単に話し、結果春貞に見込まれ屋敷で奉公することになつたと説明した。

「我らは好んだ訳ではございませぬが屋敷は幾多の攻撃を受けました。また畏れ多くも上様が鷹狩りの帰りに襲われた際、我が屋敷に逃げ込まされたことなどから

心ならずも忍びの集団と戦うはめとなりました。さらに逆恨みから屋敷が全焼の憂き目に遭つたこともございました」

春貞は久四郎に向かい、

「そうした攻撃は多人数がほとんどであり、一対一の戦いとは無縁なもの。飛び道具もあれば時に見たこともない武器を使われることもありましょう。

残念ながら亡くなつた我が軍師、弥三郎はそうしたことを危惧し剣術だけでない攻撃にも攻防できる力を温存しなければならぬと、さきほど申しました通りの縁で我が屋敷に奉公となつた静香の能力を認めて教え込んだのです」

一呼吸置いた春貞は続けた。

「ご一同に怪我をさせてはならじと使いませんでしたが、静香は飛び道具もそして火薬も使いこなします。

怒らせては怖い女子でございますな」

と破顔すると静香は赤くなり俯いた。

「なるほど。

春貞さまや夏穂さまは申し上げるまでもなく剣の達人、横手どのは剣は勿論槍をも得意と存じております。

その上に静香さんの武器が加われば万全ということです「ございますな」

久四郎は手を打ちながら言い切つた。

「まあ、申すまでもなく戦いや争いに巻き込まれずに済ませたいものでございま
すがな」

と春貞は笑つた。

六

翌朝、朝餉を馳走になつた春貞たちは名残惜しそうに屋敷の前に並んだ雲助たち
に頭を下げ尾張への旅を続けることになつた。

「ご無事で」

の声に送られながら春貞は松谷久四郎と手を取り合つて別れた。

歩き始めてすぐに富三郎が右手を示し、

「あの蓮馨寺は診療所の笙船先生が敬愛されておるという芭蕉老翁の墓がござい

ますぞ。

そしてすぐに駿河国に入りますな」と説明した。

「ということは沼津じゃな」

「はい」

一行の左手には狩野川が見えてきた。

「父上、尾張に着きましたらまずどちらへお出かけですか」

夏穂に聞かれた春貞は、

「そうよなあ。尾張というか名古屋は二ヶ月ほど滞在することになる。

俺が予想するに殿はきっと身近に屋敷を与えるからそこに住めというに違いないがそれは困る……」

と言うと、

「堅苦し過ぎますな春貞さま」

富三郎が即座に答えた。

「いやまさか城内というわけではあるまいが、それなくとも肩が凝るというのにな。ここはひとつ良い宿を探してできるだけのんびりと過ごしたいものよ」

春貞は青空を仰いで呟いた。

「あれば父上、ここは近江屋さんに立ち寄りご挨拶がてら良いお宿をご紹介い
ただきましょう」

夏穂はそうたたみかけた。

「まあそれが現実的だな。

ともあれ急を要する旅ではない。ゆるりと向かおうぞ」

機嫌良く春貞が言い切った。

そして江尻宿、先の難所を控えた掛川宿、舞阪宿、藤川宿を経てやつと宮宿に到
着した春貞一行はまず名古屋城下にある大店、札差の近江屋に向かつた。
突如富三郎が、

「春貞さま。殺氣はいたしませぬがつけられているようですな」
と小声で呟くと春貞も、

「そのようだな。宮宿に入つたころからのようだがさて……何者か」

一行は尾行に気づかない態を装つて夏穂の案内で近江屋の暖簾を潜つた。
四年前に夫格左衛門と一緒に来たことがあつたからだが立派な店内に入ると帳場
にたまたま大番頭と座していた主人金次郎と目が合つた。

「あ、貴方さまは」

絶句した金次郎は飛び上がるようにして夏穂の前に座り、

「お懐かしゅうございます：夏穂さま」

と笑顔を向け、同行の三人のうち春貞を仰いで、

「も、もしかして松平春貞さまではござりますまいか」

驚喜の態で声を上げた。

「さよう。お初にお目にかかります。松平春貞でござる。

尾張にしばし滯在いたすので御礼とご挨拶に罷り越しました」と笑顔を向けると、

「ま、まずはお上がりいただきましょう。

誰か、すぎを四つお持ちしなされ」

金次郎が手代らに命じた。

四半時もしないうちに四人は奥座敷に迎入れられ、普段は伏せがちになつたという隠居金右衛門が番頭たちに抱えられながら入つてきた。

崩れるように座しながら両手を突いた金右衛門は、

「い、命のあるうちにこうしてお目にかれました。

これであの世の父君徳川綱誠さまに会わせる顔が出来申した。

嬉しうございます、春貞さま」

と泣いた。

徳川綱誠は尾張藩三代藩主であり春貞の実父であつた。

「何をお気の弱いことを…。

父の顔も知らぬそれがしだが、金右衛門どのらの御蔭で母と再会できただけでなく江戸で一緒に暮らしております。

あらためて御礼申し上げる」

春貞が金右衛門に頭を下げるとき金右衛門と金次郎が慌てた。

「お会いしたばかりで失礼だが、医者には診てもらつているんでしょうな、金右衛門どの」

春貞が気になり問うた。

「はい。門前町の本道のお医師、小林常元先生にお世話になつておりますが、どこが悪いというより歳でござりますでな」

と笑いつつ、

「春貞さま。何の為に尾張にいらしたかをお聞きするのはご無礼でございましょ

うが、ご宿泊先はお決まりでございましょうか」

金次郎が女衆の運んで来た茶を勧めながら聞いた。

「そのことでござるが、二ヶ月ほどゆるりとできる宿をご存じであればご紹
介いただけまいか…」

と春貞が言かけたとき番頭が慌てて飛んできた。

「だ、旦那さま」

「これ、お客様の前で失礼でしょう」

金次郎が窘めると、

「お城のお侍さまが三人お見えになり、こちらに松平春貞さまご一行が入つたで
ある。会わせろと申され、今にもお上がりになりそうな剣幕でして…」

番頭が青い顔をしながら訴えた。

「城と言われたが城内の侍か」

春貞が問うと、

「はい。近習の岩瀬元治郎さまと申しておりますが」

番頭が答えると春貞は、

「迷惑をかけた。それがしが出てみよう」

と腰を上げた。

春貞が店頭に姿を現すとまだ二十代か、若い侍が三人いらっしゃった様子で待っていた。

「俺が松平春貞だが、何の用だい」

春貞はわざと碎けた物言いをした。

「こ、これはご無礼いたしました。」

それがし殿の近習の一人でございます岩瀬と申します。

恐れ入りますがこれからご一緒にお城までおいでくださいませぬか」と言つた。

「俺たちはいま着いたばかり。まずは世話になつてこの御店に挨拶に来たのだ。お主たちに指図を受けることではない。」

「帰りな」

春貞が静かに言うと、

「と、殿から松平さまをお迎えし間違の無いように連れするようとの命でござりますのでどうかご同道願えませぬか」

岩瀬元治郎が頭を下げた。

「もしかしたら俺たちの後をつけてきたのはお主たちかい」

あきて春貞は声を荒げた。

「お迎えに出るよう殿のご命令でございました。

お声をかける間もなく近江屋にお入りになられましたので…」

岩瀬は重ねて城主徳川宗勝の命だと繰り返した。

春貞の背後で金次郎と金右衛門が心配そうに見つめている。

「よいか、いま申したとおり俺たちは今し方近江屋さんに挨拶に参つたのだ。そ

れにな、城なら馬鹿でもどこにあるかは分かる。

お主たちに指図されぬ謂われはねえから帰りな

春貞は諭すように言い切つた。

「しかし、失礼ながら松平さまは殿にお会いに来られた方と伺いました。である
ならまづは殿にお目にかかるのが筋…。
なにとぞ、なにとぞ」

岩瀬元治郎は意を譲らず繰り返した。

廻りに客がいないことを確認した春貞は、
「嫌だね。

それとも何かい、腕尽くで引っ立てようとでも言うのかい」

にやりと笑つた春貞に岩瀬は思わず圧倒され一步下がつた。

「帰つて代五郎：いや宗勝に言え。

俺は会いに来たのではない。求められて江戸からはるばるやつて來たのだとな。

これ以上横車を押すならこの近江屋さんに一晩世話になり、明朝そのまま江戸に戻るとな。

出てけ、馬鹿者」

春貞の気に飲まれた三人は震えながら店を飛び出していった。

「迷惑をかけた金次郎どの、金右衛門どの」

春貞は笑顔に戻つていた。

「お城の方、それも殿の近習のお方を追い出して宜しかつたのでしょうか。

お咎めはございませぬか」

心配顔の金次郎と金右衛門に、

「なに、宗勝の命を若いやつらが曲解したのだろうよ。

宗勝がああした馬鹿を言うわけはねえ」

笑いながら奥座敷に一同が戻つた。

「春貞さま。商人の我らにどの付けは不要。是非呼びすてに願いますぞ」

金右衛門が体を揺らしながら願うと春貞は笑いながら、

「ではな、さん付けで呼ばせてもらおうか」

と言い切つた。

「でな、ああした連中と四六時中一緒にいたくはねえのだ。

落ち着ける宿をな、紹介してくれめいか」

春貞は磊落に願つた。

「それなら是非是非、当屋敷の離れをお使いいただけませぬか。

以前夏穂さま、米道さまらがお越しいただいた際にもお使いいただいた場所でござります。

春貞さまにもきつと気に入つていただけると思ひますし、南寺町に近く夜半は喧噪も届きません」

金右衛門が両手を突いて願つた。

「おい、手を上げてくれ。頭を下げなければならねえのは俺の方だ」

春貞はそう言いながら、

「それでは遠慮無く厄介になろうか。積もる話も聞かせてくれ金右衛門さん」というと金右衛門の表情がぱあつと明るくなつた。

近江屋の離れは居間の他に五部屋もある立派な建物だつた。

取り急ぎ居間に落ち着いた春貞は夏穂に、

「夏穂。お前最初から近江屋に宿を紹介させればこの離れを使えと言つてくれる」と算段していたんじやあねえか」と問うた。

「はい、父上。ばれましたか」

夏穂は笑いながら、

「格左衛門さま、留吉さん、そして後に大奥さまとしばし過ごしたこのお屋敷にもう一度、それも父上たちと過ごしたいと思いまして」

としらつと白状した。

「しかし夏穂さま。確かに町の喧噪も届かず、よい所でござりますね」

静香も気に入つたようだつた。

「それにしても春貞さま。あの追い返した近習たちは上役にこっぴどく叱られま
しょうな」

富三郎が思い出しながら笑った。

「そうよなあ。殿が良かれと命じたことで相手が：俺たちのことだが、迷惑し不快に思う。

実に人を使うというのは難しいものよなあ。

俺の想像だがな、殿は俺に愚痴を聞いてもらいたくて呼んだのではないかと思っている程よ」

春貞は言葉を吐き出すように言つた。

「尾張国はそれでなくとも広いと聞きましたが、御政務は大変でしようね」

静香が呟くと、

「そうですな。尾張国には千ほどの村があり、愛知・春日井・葉栗・丹羽・中島・海東・海西それから知多の八郡に分かれていますしその他にも美濃・三河・木曾・近江・摂津の各国にも領地があります。

これらが尾張藩領でござりますからその行政は大変なものでございましょう」

横手富三郎が氣の毒そうに言つた。

「富三郎は物知りよなあ。

こりやあ宗勝とてさぞや頭が痛いことが多いに違えねえ。同情するぜ」

春貞も言い切つた。

「ともかく、俺たちが着いたことは殿のお耳に間違いなく入るに違ひねえ」
そう春貞がいうと静香が荷物を解きながら、

「明日から私たちはどのように過ごしたらよろしいのでしょうか」と聞いた。

「そうですな。

春貞さまはきっと殿のお側にということになるのでしょうかが、我々は何をしたら
よろしいのでしょうかかな」

富三郎も静香と顔を見合させて呟いた。

「おいおい。俺だつて一日中殿の側…というか城中にいるつもりはねえぜ。
いくら何でもそれは困る」

と本当に困った顔をしたので夏穂が笑い出した。

「まあ殿が俺たちに何を求めているのかを知つてから考えようではないか。
まずは登城しての挨拶だが、この四人で乗り込むぜ」と笑うと、

「登城ですか…」

富三郎が驚くと春貞は、

「驚くことはあるまい。

この前は千代田城に上つたではないか。大した違いはあるまいよ」

春貞が言うと静香は、

「私は千代田城本丸に忍び込もうとしたことはあります、お城に登城など初めてでございます」

としつつ呟いたので春貞と富三郎が笑い転げた。

七

その後の夕餉は離れの居間で金次郎と金右衛門が加わつての歓迎の宴となつた。

「そうだ金右衛門さん、代わり映えしねえが我が屋敷の畠で増やした高麗人参だ。土産代わりに収めてくれ」

春貞が紫の縮緬風呂敷に包んだ桐箱を差しだした。

「これはこれは、年寄りには何よりのいただき物でござりますよ」

金右衛門が包みを両手で抱えた。

いつもは臥所で夕餉を取るという金右衛門だつたが今夜は特別だと座椅子に寄りかかつて同席していた。

箱膳が片付けられた頃、金右衛門はあらためて春貞に向かい畳に両手をついた。

「おいおい、何の真似だ。金右衛門さん」

春貞が湯飲みを置いて言うと金右衛門は、

「春貞さま。この金右衛門の命、この二、三ヶ月と承知しております。

息のある内に直接お目にかかれたことは望外の喜び。

差し出がましくは存じますが、金右衛門の遺言とご承知いただきひとつ話しをお聞きいただけませんか」

と聞いた。

「無論だ。行き掛かりはともかくお前さんたちの誠心のおかげで俺たちは不自由なく飯を食つてこられた。

有り難いと思つてゐる」

春貞が言うと、

「お耳汚しでしたらお詫びいたしますがそのことでござります」

金右衛門がゆらゆらと頭を下げた。

「何なりと言つてくれ」

「年に二度、為替の受領確認だと江戸相模屋の清右衛門さんから文が届きますがな、その中身の大半は春貞さまらの近況でございます。」

また四年前になりましたが、米道さまと夏穂さまらとお会い出来た際に春貞さまのあれこれをお聞きすることができました」

「……」

「春貞さま」

金右衛門は春貞を直視した。

「貴方さまはお父上から捨てられお子だとおっしゃつていたとか……」

「ああ、俺も歳を重ね、子の親となつてからは些か考えも変わつたがそう言つたこともあるし今でもそう思つてるぜ」

春貞が応じると、

「お立場からそう思われても仕方がないかも知れませぬ。特に感受性の強いお子の頃は……。」

しかし春貞さま。ほんの一時、お父上・綱誠さまのお身になつてお考へいただけませぬか」

「……」

どのような話になるのか、横手富三郎、夏穂そして静香も固唾をのんで見守つていた。

「釈迦に説法なれど、父君はなんの思慮もなく市井の弥生さまと情を結ばれた訳ではございませんんだ。

側室にとのお考へだつたとご本人からお聞きいたしました」

金右衛門はゆつくりと、少し喘ぎながらもしつかりと話していた。

「ただし一国一城の殿さまとて何もかも思い通りにできる訳ではございました」
幕閣には付け家老もおいでです。

さらに当時、お世継ぎの話が持ち上がつてきたときでございました」

「ふむ……」

「すでにご承知の通り、御正室は広幡忠幸様の御娘・新君にいぎみさまを始めとして結局ご側室十三名に四十人の子女を授かつたと伺いましたが、ご正室との間にお子は

できず、またその大半は夭折されました。

綱誠さまはお元気であられましたが、お元気の内に幕閣も含めて早めにお世継ぎを決めるべきという話しが持ち上がつたときでもございました」

世継ぎとしての男子には徳川吉通（十男）、徳川継友（十一男）、松平義孝（十五男）がいたが、春貞誕生に先立ち松平通温（十八男）そして春貞の誕生三ヶ月後に徳川宗春（十九男）が誕生していた。

「幕閣のお偉方は後継問題をこれ以上複雑にする事を危惧され、弥生さまを側室にお迎えすることに反対なさつたと伺っております。

無論綱誠さまの本意ではございませなんだ。

それに…」

金右衛門が言い淀んだ。

「いかがされました」

夏穂が心配して声をかけた。

「いや、その前後、尾張藩内はとても危険な状況にあつたようでございます」

金右衛門がぼそつと呟いた。

「危険とな」

「はい。

お父上の死因はご承知ですか

意外な話しに春貞も気色ばつた。

「親爺は大食漢で食通だつたとか。

確かに、草莓を食したことで食あたりとなり、それが原因で死亡したと聞いたが
な、違うのかい」

「はい、確かに。

しかし春貞さま、当時から毒殺の疑いもございましたのです

金右衛門の言葉にさすがの春貞も息をのんだ。

「なんと…」

「事実、綱誠さまの後をお繼ぎになつた徳川吉通さまは食後急に吐血して悶死さ
れました。これは明らかに毒殺でございましょう。

ことは尾張藩に留まらず將軍継嗣問題ともからみ、後継ぎの問題は複雑怪奇な様
相だと生前お父上御自らに伺つたことがありました」

「うーむ」

金右衛門が言うには、綱誠は心から弥生を愛していた。しかし春貞を生んだとな

れば後継者問題に無関係とはいはず、下手をすれば母子共に命を奪われ兼ねないと綱誠は考えたのだという。

為に春貞を御連枝に預け、尾張とは無縁の赤子として育てて欲しい旨を託し、生母弥生を産褥熱で亡くなつたと墓まで建てて偽り、その実は近江屋と井筒屋に相談して熱田神社に隠し母子の安全を図つたのだという。

「その上で…当事者が申し上げるのも不遜かと存じますが、尾張藩とは関係なく綱誠さまお一人の裁量で手前どもと井筒屋さんに多額の運用金をお預けいたしました。

無論それは将来共に母と子が無事に暮らしていくようとのご配慮でございました」

金右衛門は疲れたか、座椅子に大きく寄りかかって話しを続けた。

「命が尽きようとしている年寄りの申すこと、ご無礼の段は平にお許し願います
が、春貞さま…これでも貴方さまは父君から捨てられたと申されますか」

金右衛門の声が震えていたと同時に春貞の肩も小さく揺れていた。

「どうやら俺は大馬鹿者のようだ…」

小さく嗚咽しながら春貞は唇を噛んだ。

「しかしながら金右衛門さん。なぜ乳母の沙代はそのことを俺に話さなかつたのだろうか」

春貞は一番の疑問を金右衛門にぶつけた。

「手前どももすべてを存じていたわけではございませんが、幼い春貞さまの命を預けた沙代さまには実母は身を隠している事だけを知らせたものの詳しい事はわざと話さなかつたのではないかと思いますがな。」

知らない者に身の危険は迫つてはきませぬからな」

金右衛門は息子金次郎の手を借り、醒めた茶を口にした。

「金右衛門さん、ありがとうございますよ。」

正直俺は今回殿の誘いを喜んで受けたわけではなかつたんだ。すでに尾張に未練はねえしこれ以上知り得ることもないと思つていた。

しかし：いまの話しさは今回尾張に来た一番の土産話だぜ」

春貞が金右衛門の両手を握り頭を下げる、

「もつたいのうござります。」

これで、あの世の綱誠さまにも会わす顔ができました。

うれしゆうござります、春貞さま」

金右衛門は大粒の涙を流しながら畳に突つ伏した。

富三郎も夏穂も静香も泣いていた。

「明日にでも機会がございましたら井筒屋の佳三郎さんにもお会いしていただきとうございます」

金次郎が願った。

八

その晩、富三郎らは旅の疲れもあつたのだろう。用意された風呂に浸かり朝までぐつすりと寝たが、春貞は夜半まで吉宗宛の文を書いていた。

旅の途中で物取りとは思えない武士たちに襲われたことの報告だつた。そして推察でしかないが、世継ぎの問題で家重を推してこの方、屋敷の米道格左衛門が二度に渡り、そして堀田万之助も襲われたことなどを記し、老中首座松平乗邑の差し金と思われる縁起つた。

「佐吉、おるか」

春貞が小さく声を出すと雨戸の石畳に佐吉の姿があつた。

「ご苦労だがこれを上様に直接お渡しすべく手配してくれぬか。ご返事は無用じや。そしてこちらが向島の幸江宛だ。

頼んだぞ」

「承知しました。公儀の繫ぎの者に間違なく託しましょう」

佐吉はそれだけ言つて闇に溶け込んだ。

翌朝は明け五つ近くに目を覚ました一同は顔を洗い身仕度をして居間に揃つた。朝餉の支度が運ばれたものの気を利かしたか配膳の女衆以外主人たちは姿を見せなかつた。

「どうだ、ゆっくり眠れたか」

春貞が三人の顔を順に眺めながら問うた。

「お陰様にて。やはり宿場の宿とは安堵感が違うのでございましょうな。

安眠させていただきました」

富三郎が血色の良い丸い顔を破顔して答えた。

「それは上々」

炊きたての飯に味噌汁と香の物、そして焼き魚がついた朝餉を食べ終わると頃合いを見計らつて芳ばしい茶が運ばれてきた。

その頃になり金次郎が顔を見せた。

「おはようございます。

よくお休みになられましたでしょか

「おかげでな、夢も見ませんでしたぞ」

富三郎が答えると夏穂も静香も笑顔で頷いたとき騒ぎが起こつた。

「だ、だ、旦那さま。た、大変でございます」

番頭が居間に駆け込んできた。

「これ、落ち着きなさい。

なにかまた出来しましたか」

金次郎が窘めつつ問うと、

「いま、お店の前に乗物が五つ並びまして、お、お殿さまがお店でお待ちでござります」

と絶叫した。

「お殿さまと言いますと…」

「徳川宗勝さまでござります。

ど、ど、どうしたらよろしいでしようか」

狼狽える番頭の声を聞きながら、さすがの金次郎も春貞を見た。

申し訳なさそうな顔の春貞が、

「まつたく朝っぱらからこれだ。

金次郎さん、まことに済まねえ。俺が顔を出してみよう」

と立ち上がった。

春貞と金次郎らが離れから続く店内に入り、帳場に向かうとその上がり框に腰をかけていたのはまぎれもなく尾張八代藩主徳川宗勝であつた。

「殿、朝っぱらから何ごとでござりますか」

春貞は遠慮のない言葉を投げかけたが、その姿を認めた宗勝は、

「おお、兄様。お出でになるのを待ちきれずにお迎えにまいりましたぞ」と破顔した。

暖簾の向こうには従者たち数十人が待っている気配があつた。
苦笑した春貞は、

「殿。ここは町屋の商家でござりますぞ。

このようない早い時刻に店の前を人馬の列で塞いでは商売の邪魔でしかございませんぬ。

春貞、お約束の通り罷り越しましたからには逃げも隠れもいたしませぬ故、お引き上げくだされ

と言ひ切つた。

春貞の背後で金次郎が平伏しながらもおろおろしていた。

「これは済まぬ事をした。

昨夕、若い者たちが無礼を働いたと聞き、その詫びもと氣が急いてな。しかし余自身が無礼者であつたか。

店主、許せ

宗勝は磊落に頭を下げたが、

「兄様。とはいえせつかくここまでお迎えに参つたのですからお支度が済むまでお待ちします。

乗物をご用意してますでご一緒に登城してくださいませ」と覺悟を示した。

「承知しました。我らの支度は四半時かかりませぬ故・殿、店先をお外しいただきしばしお待ちを」と願つた。

機嫌良く頷く宗勝をその場に残した春貞らは離れに戻つた。

「これだから城の奴らとは顔を会わせたくねえんだ」

ぶすつとした顔で春貞がこぼすと夏穂が思わず「くすつ」と笑つた。

後から追つてきた金次郎が、

「は、春貞さま。殿さまをあのままお待ちいただいてもよろしいのでござりますか」

と聞くと春貞は、

「無論よ。当人が待つと言つているんだ。

それには金次郎さん、茶なども出す必要はねえぜ。

そのまま放つておけばよい」

苦笑いしながら答えた。

ともあれ城主が近江屋に泊まつた客を迎えて来たなど前代未聞であり、この日の出来事はその後永らく近江屋に語り継がれる事となつたが、春貞はじめ富三郎、

夏穂そして静香の四人は迎えの豪華な乗物に乗り込み、藩主宗勝と共に名古屋城に向かつた。

「金次郎さん、迷惑をかけた。夕刻には戻るでよろしく頼む」

乗物の扉を閉める前に春貞は声を上げたが、その後ろ姿に平伏しつつも金次郎はもとより店の者たちが驚きに震えていた。

あつと言う間に名古屋城の本丸に到着した一行は藩主自らの案内で唐破風屋根をいただく堂々たる外觀の車寄から上がつた。

車寄は、將軍など正規の来客だけが上がる本丸御殿への正式な入口である。

春貞は別にして横手富三郎ら三人は足に震えが来たと後に語つていたほど尋常な扱いでは無かつた。

一行は大廊下を進んだ右手にある表書院に案内されたが、藩主との正式な謁見はこの部屋でおこなわれた。

そこは大きな入母屋造りの殿舎で、藩主が着座する上段之間のほか、一之間、二之間、三之間、納戸之間の五部屋があつた。

宗勝は、

「兄様。城内はご承知のようにこうした堅苦しい部屋しかござらんのでご勘弁願いたいが、まずはこの一之間で足を伸ばしてくださらんか」と自ら一之間に胡座をかくと小姓と思われる若い男が慌て、「殿。上段之間にお座り願います」と小声で言つた。

「馬鹿を申せ。兄様たちをこの一之間に残して余のみ上段之間に座すわけにはいかぬ。それとも五人全員で上段之間に座すがよいか」

宗勝が悪戯っぽい顔で詰め寄ると若者は、

「そ、それは…。ご無体を言われますな殿」と平伏した。

「兄様。万事が万事城はこの調子にて市井の感覚を忘れてしまうのです。為にいろいろとご無礼を申し上げましたが何卒ご容赦を」と頭を下げた。

静香は表書院一之間と聞いた部屋の豪華さに見惚れていた。

「さて兄様。宗勝が望んだとおりおいでいただけましたが、まずは昨晩のご無礼をお詫びいたします。

若い者が功を焦つたか、ご不快な思いをさせました」

宗勝が春貞に向かつて再び頭を下げると小姓が驚愕していた。

「殿。御三家筆頭格の尾張藩主さまがそうそうおつむを下げるものではございませんせぬ」

春貞が笑顔で言うと頷いた宗勝は、

「さて、兄様。夏穂どのは存じておるが改めて他のお二人を紹介くださらぬか」と話柄を変えた。

一通り紹介が終わつた後に宗勝は話を戻すように、

「兄様たちは近江屋にお泊まりだつたようですが、余がお願いしておいでいただいた大切な客人。

今夜から余が用意しておいた屋敷にご逗留願いたい」と言い出した。

春貞は（そら來たぞ）といつた表情を富三郎らと交わした後、宗勝に向かい、「殿。ご配慮はありがたいですがその儀は遠慮申し上げます。

ご承知のようにそれがし型にはまつた生活が嫌で尾張を逃げ出した男。例え殿の仰せでもこればかりはご勘弁いただくしかございませぬ」

春貞は頭を下げた。

「しかし、それでは兄様。賓客にあまりにも無礼であろうと思いますでな、曲げてご承知いただけませぬか」

宗勝もたたみ込んだ。

「いや、殿のお呼びの際にはこうして登城いたしますがそれ以外の時間は町屋で過ごしたく思います。遠慮などではなくそれがそれがしの願い」。

どうしてもとおっしゃるのであれば、これから踵を返して江戸に戻ります」

春貞は笑顔のままそういうと宗勝は諦めたのかやつと首を縦に振った。

「わかりました兄様。

それはそれとして余が心して置かねばならないことがあればおっしゃつてくださいれ」

という宗勝の言に春貞は、

「殿がそれがしをお呼びくださつた一番の理由は剣術の披露といつた事だつたと思いますが、それにつけてひとつお願ひがござります」

「ふむ……」

「稽古というか、城内の武士たちと稽古や試合をすることは吝かではございませんが、稽古はともかく、試合の場合は必ず殿の御前で行うことを徹底してください。

尾張は尾張柳生新陰流の地。殿が申す通り些心意気は失いつつあるとしても当藩剣術指南役のお方や名のある名手の方々との試合は遠慮させていただきとうございます」

「なぜですかな」

「試合でそれがしが負けるのは何の問題もございませんが、試合は必ずなんらかの遺恨を残すものです。ましてや当藩で剣の腕を知られている方々となればふらつと江戸からやつてきた男に遅れを取つたとなればそのまま笑つて済ませるお方は少ないでしょう。

ですから、極力そうした切つ掛けはお作りにならぬよう伏してお願いいたします」

春貞は一之間に入つて初めて宗勝に平伏した。

「わかった。分かり申した兄様」

深い息を吐いた宗勝は、

「それでは初日からいきなりあれこれと願つてはご迷惑だと思いますので本日はご挨拶程度に留めておきましょうぞ。

明日あるいは明後日にまたご一報をいたしますのでその際にはよろしく頼みます」

と宗勝が言うと春貞は、

「承知しました。しかし殿。近江屋に人馬と乗物を横付けされるのはお止めくだ

され」

春貞が戯けたように願うと宗勝が大きな声を出して笑った。

城を退出した春貞らは金色に輝く天守の鰐を仰ぎ見つつ背を伸ばした。

「いやはや。宗勝さまは春貞さまには頭が上がらないお方と承知はしておりますが、城内はなにもかもに圧倒され息苦しくなりますな」

富二郎が呟いた。

「そうだな。市井で育つた代五郎：いや殿だ。本心は俺たちと同様に自由な暮らしをしたいと思つているのだろうが、運命というか天命は殿に尾張八代藩主を命じられた。

お氣の毒といつたら叱られようが、運命とは厳しいものよ」

春貞は再び黄金の鰐を眺めつつ言つた。

「しかし父上。殿さまは本当に剣術の志氣を高めるために父上をお呼びしたのでしょうか。私にはそれだけとは思えないのですが」
夏穂が問うと静香もどこか釈然としないようで頷いた。

「そうよなあ。俺もそう思つてゐる。

剣術の志氣を高めるという意味もあるのだろうが、それは武術を奨励している上様に俺を尾張に滞在させる許可を得るための方便のように思えてならんがな」

春貞が答えると富三郎は、

「方便でございますか？」

と怪訝な顔をした。

「うむ。

これまた俺の想像だがな、尾張は殿の手腕で経済の立て直しもまづまず上手くいつているようだ。しかし上様は次男と四男に田安家・一橋家を与えた。

その意図はな、尾張藩前藩主宗春との対立を踏まえ、従来から徳川宗家の後嗣を出す役割を担ってきた徳川御三家と將軍家との血縁関係がしだいに疎遠になつた

こともあり、御三家とは別個の親族を将軍家の新たな藩屏とすることにあると俺は見ている」

「ということは、御三家の力を弱めるのが田安・一橋家の役割だと申されますか」

富三郎が応じた。

「まあそんなところだろうよ。

無論そうしたことは宗勝の殿も敏感に察しておろう。

殿は上様に近いと信じられている俺を尾張に滞在させ、尾張の幕府に対する誠心と一心のなきことを上様に伝えて欲しいとお考えではなかろうか

春貞は赤く染まつてきた名古屋の空を仰いで呟いた。

「なるほど。特にいま上様は隠居の意志をお持ちですし後継の問題でお悩みです。そうした微妙な時期だからこそ、その機に乗じての動きに神経を尖らせておいでなのかも知れませぬな」

夏穂が納得の態で答えたが静香は、

「しかし春貞さま。殿さまはそうした一心など微塵も持つてはおられないのですありますか」

と春貞を見た。

「無論その通りよ。しかしな、前藩主宗春がそうであつたように良い悪いはともかく藩主一人の力ではどうにもならない事もあるものよ」

ふつと息を吐いた春貞は、

「静香、あの豪華で煌びやかな城の内部を見ただろう‥。

いくら戦いのない時代だとは言え、俺にはあれほどの贅沢な飾りは不要に思えてならねえ。

皮肉な見方とは承知しているが、あの豪華さは尾張という御三家筆頭格の権威を誇張するためと、その中で蠢いている愚かな人間共の業を包み隠すためにあるようと思えてならんのだ」

そのとき富三郎が、

「嗚呼、読めましたぞ」

と叫んだ。

「春貞さまを尾張に召還されたいと申されたとき最初上様は否の意志を明らかにされましたな。

結局尾張滞在は最長二か月を超えてはならぬ、春貞さまはご自分にとつて日々必

要なお人だからと申されましたか…」

「そうよ。万一俺が尾張に長逗留し、生まれ故郷の血というか色に染まり、尾張の意志を受け継ぐ人間になつては厄介だとお考えだつたかも知れねえ」
春貞と富三郎は顔を見合わせて頷いた。

「ということは、父上は幕府と尾張との鎌^鎧でもあるわけですね」
夏穂が言うと春貞は、

「だからそんな板挟みになるような場所には來たくなかつたんだ」と声を上げた。

九

翌日は宗勝が気を利かしたのだろうか、城からの呼び出しがなかつた。

春貞たちは近江屋で旅の疲れを癒やし、町屋の中心街を散策した。ただし春貞の

命で単独行動は禁止されていた。

「名古屋は京の都と同じく碁盤の目のように整備されているんですね…」

富三郎が本町通りを北に、すなわち城に向かつて歩きながら言つた。

「そうよなあ。

この道を北上すると本町大手門があり、その内側は三の丸一帯だ。

その当たりは年寄りや用人をはじめ尾張藩の重臣たちの屋敷や役所がある場所だ。一部に社寺があるがな、後はすべて藩士たちの宅と役所関係が立ち並び町屋はひとつもねえな」

春貞がいうと夏穂が、

「殿さまはそのあたりにあるお屋敷に私たちを住まわせようとお考えだつたのでしようか」

と心配顔で聞いた。

「ま、そういうよ。しかしな、夏穂のおかげで近江屋の離れに落ち着いた俺たちだ。三の丸には住みたくないよなあ」

と笑つた。

そして夕刻には井筒屋の佳三郎との体面となつた。

四年前には**矍鑠**^{かくじやく}としていた佳三郎も近距離とはいえ駕籠でやつてきたが、金右衛門同様、春貞と会えたことは冥土の土産だと涙を流した。

酒が回ってきた頃、春貞は金右衛門と佳三郎を交互に見つつ聞いた。

「俺の知る限り親爺を知っている者はお二人だけだ。

こうした機会にな、是非俺の父、尾張藩三代藩主徳川綱誠なる男がどのような男だつたか、なぜ知り合つて毎年金を送つてくれる仕儀となつたのかを教えてくれねえか」

と…。

金右衛門は一瞬目を閉じ、ぼそつと話し出した。

「あれは元禄九年六月の半ばの事でございましたか。したがつてすでに四十八年ですか…過ぎておりますので我らが爺になるはずでございます」

「嗚呼、俺が生まれた月だな」

春貞が言うと金右衛門は小さな盃をひと舐めして続けた。

「手前が近江屋を継いだ次の年でございましたが、御店はお陰様で札差として成功し何代も前からお城への出入りを許されるようになつておりました。無論手前

の力ではなく父や祖父の努力の賜でございます。

昼過ぎ、小雨が上がったときのことです

編み笠に着流し、そしてお刀を腰に一本差しの御武家さまが従者をお二人連れて暖簾を潜られました。

見れば外には馬が三頭、その背に重そうな箱を乗せて繋がれておつたそうです

「それが親爺だつたのかい」

「はい。無論そのときは分かりませんでした。

手前はまだ経験も浅くましてやお殿様のお顔をしかとは覚えてはおりませんでした。

店に入られたお侍様は笠を取ると店主：手前のことですが、店主に会いたいと申されました

されたそうです。

応対した大番頭はみるからに人心賤しからぬお姿を見てお城のお偉い方だと推察したそうですが、これまた城主さまとは知らなかつたそうです

「なるほど」

春貞は興味深く手酌で酒を飲みながら聞いていた。

金右衛門曰く、大番頭が「承知いたしました。失礼でございますが、どちらさま

で」と聞くと小声で「綱誠、徳川綱誠じゃ」と言われたそうだ。」

「その御名は尾張三代藩主さまと同じであることは大番頭も気づきましたがまさかご本人とは思いませんし、もしかしたら騙りかと身構えたとき従者のお一人も笠を取り『大番頭、わしじや』と名乗られたそうです。」

大番頭はその従者のお方とはお城で面識があつたそうで、要はこのお方は本物の城主さまでお忍びでお越しになられたことが分かりました」

金右衛門の表情がさも楽しそうに輝いた。

「早速奥座敷にお通しいたしましたが、当時の手前は御店を守り発展させることに気ばかり焦っていた時期でもございます。」

例え本物の藩主さまとはいえもしかしたら大金を貸し出せとかなんとか無理難題を申されるのではないかと身を固くしておりました。

ところがあに図らんや、お前を：御店を信用し秘密裏の頼みがあるとおっしゃやり従者が重そうな箱を五つ座敷に持ち込みました。

『近江屋、ここに○千両ある。これを運用してな、金を増やしてはくれまいか。』

ただしこれは藩の金ではない、自分の蓄えだ』とおっしゃるのです。

もしかしたら金を貸せとの仰せと思いましたが、反対に大金を眼前に積まれたの

でございますよ。

ちなみに具体的な金額はお聞きにならないでくださいませ。これまた綱誠さまとの約束で秘密ございますのでな

「ほほう、面白えことになつてきたな」

春貞たちは膝を乗り出した。

綱誠が言うには、

このような姿で忍んで来たからには察しの通り表に出せない理由がある。実は女を一人匿つて欲しいこと、その女の産んだ子に運用して得た金の一部を生涯に渡つて送り続けて欲しいという話しだつた。

「無論このお話しさは極秘中の極秘であり、万一お前たちの口から漏れたことが分かれば命だけではない、御店も潰すと思え」という怖いお話しでした。反面秘密を厳守してくれるならこの金は自由に使えとのおおせでした。

当時の近江屋は暖簾こそ古いものの新しい商売に手を出せるほどの余裕は無く店を継いだばかりの手前はそれが不満でした。

そんなわけですから手前には天から降つてわいたような良い話しさに聞こえたのでございます。

また好奇心もあり腹をくくつた手前は秘密は守る。万一手前の口から漏れたとするならいつでも斬り捨ててください。その代わりいま少し詳しいお話しを聞かせていただかねば判断が出来かねますと申し上げました。

領かれた綱誠さまは計画の一部始終を聞かせてくださいました。どうやら近江屋は勿論、手前という人間を随分と観察されていたようと思われます」

金右衛門が危惧した一番の問題は運用に制約があるかどうか。お子たちにお送りする額はどれほどでなければならないのか。また運用に失敗した際はその責任はどうなるのかにございました。

運用は上手く行けば大きな儲けとなります、失敗すれば手元の金まで失うことにもなりかねません。そして失敗は商売につきものでございます」

春貞は無言で頷いていた。

ふうつと息を吸つた金右衛門が続けた。

「私は思うことを正直に申し上げました。

この計画は手前一人では大がかり過ぎて難しいこと。是非手前を信用してくださいるのなら手前の子供の頃からの友である両替商井筒屋の店主に半分協力を求めたいと。であるなら万一手前が失敗しても井筒屋さんが上手いくかも知れませ

ん。

また一人より二人の方がいろいろと知恵も浮かぶと思ひますと申し上げたら綱誠さまは膝を叩いてお喜びになりました

「ほう…」

「春貞さま。○千両もの大金を眼前に置かれれば、ましてや好きに運用して良いと言われば目も眩む者もおりましような。

殿さまは『お前は我一人で独占しようとしないところが気に入つた』と大層褒めて下さり手前の案を聞き届けて下さいました。そして佳三郎さんにご相談し一緒に秘密裏の事業をやつてみるとことにしたわけです。

しかし春貞さま。金を運用というのはある意味我らの商売でございますが、それより苦慮したのは母君を安全秘密に匿うことでございました

金右衛門は遠くを見るような目付になつた。

「で、井筒屋さんと二晩ああでもないこうでもないと考えた末に熱田神社の大宮司さまに願うことにしておきました」

それまで黙つて金右衛門に話しを任せていた井筒屋佳三郎が口を開いた。

「資金運用も我らの手柄というよりその頃から尾張の経済政策が軌道に乗り、市

井にも活気が出て来ましてな、面白いようにまあ儲かつたのでございますよ。

その一部をお約束通り：そう春貞さまと沙代さまが江戸に向かわれてからはすでに信用取引がございました日本橋両替商相模屋の清右衛門さんに願い、お屋敷にお届けただく手筈を整えたのでございます」

金右衛門が頷きつつ、

「運用は小さな失敗もままございましたが、幸いこれまで総じてよい結果となりまして手前どもはその利益を元手に御店の拡張や新しい商売に手をつけお陰様でいまでは名古屋の大店として誰もがお認めくださる御店となりましてござります。無論井筒屋さんも同様です。」

「したがつて手前たちの成功の一端は春貞さまの父君、徳川綱誠さまのおかげなのでございますよ」

二人の分限者は顔を見合させてそう言い切つた。

夏穂が口を挟んだ。

「大体のことはわかりましたが、父上の…爺さまはどういうなお人だつたのですか。父上と姿形は似ていたのですか」と問うた。

「はい。当時綱誠さまは御年四十四歳だつたはず。

それはそれは良い男前でございましたし、ご承知のように新陰流第七世でもございましたからその身のこなしは優雅といいますか、我々男から見ても惚れ惚れするお方でございましたな。

失礼ながら春貞さまはその当時の父君より五つほどお歳を召していらっしゃるはずですが、よう似ていらつしやいます。

ただし春貞さまは当然でございますがお母君、弥生さまの御気性が加わつておるようでございますがな……」

金右衛門が言うと春貞は、「お節介なところかい」と笑つた。

続けて佳三郎が、

「その後、機会をいただき報告のため二度ほど金右衛門さんとお城に上がりましたしお殿様が御自らこちらへお忍びでいらっしゃったことが一度ございましたな。

なんと申しますか、当時剣を持つたらあれほどお強い方もいらっしゃなかつた

はゞですが、私共商人にも氣さくにお会いくださいましたし失礼ながら御店の女衆にも人気がございましたな」と思い出し笑いした。

「そりやあ人一倍の女好きで道楽者だと聞いたことがあるからな」春貞も減らず口をたたいた。

腕組みした春貞はしばし無言でいたが、

「俺は承知のように親爺に捨てられた息子だと思い込んでいた。しかしこの度お主たちのおかげで長年わだかまりが払拭できた思いよ。

今となつては親爺に何の恩も返せねえ俺だが、せめて尾張にいるうちに墓参りにでも出向こうか：」

と呟くと一同が、

「それはようございます」

「よろしいですな」

と言い合つた。

「菩提寺は建中寺でござります、春貞さま。
けんちゅうじ

我々もご命日の六月五日には毎年金右衛門さんと二人でお墓参りに出向いております」

佳三郎が嬉しそうに声を上げた。

ちなみに建中寺とは、現在も愛知県名古屋市東区筒井にある浄土宗の寺院であり、江戸時代を通じて代々の尾張藩主の廟が置かれていた。

十

翌日の明け四ツになり登城の要請が宗勝から届いた。

文によれば半時後に乗物で迎えに行くこと、そして今日は春貞一人で頼むとのことだつた。

春貞は徳川葵紋の入つた継ぎ袴を着て、近江屋が呼んでくれた馴染みの髪結いに髭を剃らせ、髪を整えて登城の準備をした。

「よいか。名古屋城下で騒ぎも起きまいと思うが決して一人歩きをしてはなら

ぬ。富三郎、後を頼むぞ」

春貞はそう言い残して迎えの乗物に座した。

登城すると早速春貞は表書院一之間に案内されたがそこには初対面の男がすでに座しており春貞に平伏した。

「お初にお目にかかります。それがしは殿の側用人、助川甚左衛門でござる。本日は殿の命により同席させていただきますのでよしなに」と再び平伏した。

「松平春貞にござる。ご承知かと存するが殿とは竹馬の友とはいえそれがしは一介の浪人者。お気遣いなされますな」と笑顔で返した。

そのとき上段之間に宗勝が小姓と共に姿を現した。

「兄様、おはようござる。

こんなふうに型どおりのお話しさはやりたくはございませぬが、これもまた余の…それがしの役目。お許しあれ」と切り出した。

「殿、どうやら本日は少々堅苦しいお話しのようでござりますな」

春貞は悪戯つぽい表情で宗勝を見た。

宗勝は、

「これから二か月の間、兄様たちに気持ち良くこの尾張にご滞在いただきたいと願い、面倒な話しさは最初に片付けておきたいと思いましてな」

上段之間の宗勝はそう言い切つた。

「もしやそのお話しとは、それがしを尾張にお呼びいただいた真の理由についてでございましょうや」

春貞が問うと宗勝は驚きもせず頷いた。

「兄様：いや、春貞どの。正直に申しますと今回の話し、どう釈明しても兄様を利用したと叱咤されても仕方のないことにござる。

無礼の段、壇上ながらこの通りお詫び申し上げるのでまづはお許しあれ」

宗勝は上段之間から春貞に頭を下げた。

「と、殿：」

側御用助川甚左衛門が例の無い藩主の行動に慌てた。

「よいのだ甚左衛門。余にとつて兄様はかけがえのないお人。

本心を申せば尾張を捨ててな、余も江戸向島の兄様の屋敷で格左衛門らと一緒に

暮らしたいところよ。

ま、夢だがな…」

宗勝は苦笑しながら言い切つた。

「殿、春貞だいたいのことは承知の上でお誘いをお受けいたしました。

そうしたお気遣いは無用に願います。

友の難儀にいくばしかの助けになれば喜びにござりますのでな」

春貞は真顔で言つた。

宗勝は吉宗に、剣術の振興を目的として春貞を迎えると願つた。しかしそれはそれで嘘では無かつたがもつと重大なことが隠されていたのである。

宗勝は、春貞を尾張に呼びたいと吉宗の前で願つたとき、吉宗がどう答えるかを試したかつた…。

徳川御三家筆頭格の尾張藩と幕府は密な関係にあることは確かだが一方尾張に限らず諸大名の力がいたずらに大きくなることを吉宗は危惧し監視し続けていた。特に吉宗は尾張の継友と将軍職を争つただけに尾張を特別の目で見ていた。

それは尾張もというか宗勝も重々承知していたが、現時点でどれほど尾張を信頼しているか、重きを置いているかをまさか直接将軍に問いただすわけにはいかな

かつた。

宗勝は温厚な藩主であつたが名君といわれた男。いかにしたら吉宗の信頼度を測ることができようかと熟考した結果、春貞の存在を利用させてもらおうと考えたのだった。

春貞は吉宗から生殺与奪の命を受けたただ一人の男。それだけに吉宗は絶大なる信頼を置いていることは知られていた。

もし尾張が、宗勝が、春貞をしばし尾張に貸して欲しいと願つたとすれば吉宗の反応はどのようになるか…。

無論宗勝は幕府に、吉宗に刃向かう気持ちなど微塵もなかつたが、御三家筆頭格の立場は他の大名らからも幕府との盾になり得る大きな存在であり、それだけに十分注意をしなければ誤解されることを理解していた。

「春貞どのをしばし尾張にお貸しいただきたい」

宗勝が願つたとき吉宗はそれは困る。自分にとつても大切な参謀であり相談相手だからと躊躇しつつも結局最長二か月という制限をつけて春貞の尾張行きを許可した。

宗勝はその結果に満足した。

なぜなら、吉宗がもし尾張を宗勝を信頼していないとすれば一時たりとも春貞を尾張に置くことは許可しないだろうと考えたからだ。

しかし二か月という期間は決して長いものではないにしろ吉宗は許諾したということはそれなりに尾張藩へ不審は持つていいことの表れに違いないからだ……。宗勝は敬愛する春貞を尾張に迎えられたことと同時に吉宗の信頼を得ているであろうことに満足していた。

ただし吉宗は宗勝の一枚も二枚も上手だつた。

宗勝の胸の内を十分に知りつつ、春貞を尾張に向かわせたついでに密命を春貞に託した。

吉宗にとつて春貞の尾張行きは密命を託すよい機会となつたのだ。そして無論宗勝は春貞が吉宗の密命を帶びていることを知らなかつた。

春貞は、

「殿。僭越ですがそれがしは殿が誠心誠意、幕府に忠義を貫くことを決意されている事実を承知しております。

それで十分ではござりますまい。

できればこの春貞、なにをするでもなく故郷の尾張を楽しんで帰りたいと願つて

おります。

それはともかく…

「それはともかく…」

春貞が言い淀んだので宗勝が問うた。

「父の墓参りをお許し願えませぬか」

と春貞が願うと宗勝が膝を叩いて喜んだ。

第五章 拝謁

一

春貞が尾張に来て早くも一ヶ月と二十日余りが過ぎた。

江戸からわざわざ来た甲斐があつたのか、春貞自身は疑問視していたがなによりも藩主徳川宗勝が喜んでくれたことで納得しようとしていた。

剣術の試合もやつたが、それは春貞の願いで深刻な対戦ではなかつたし和気藹々なものだつた。

また無外流の横手富三郎や女流剣士の夏穂も珍しがられて試合を多々望まれたし特に普段対戦する機会も無い忍びの術を持つた静香に若い藩士たちの人気が集まつた。

袋竹刀を持つた若者と細紐一本持つた静香が試合をしたとき、若者の竹刀が空を切つたと思つたら静香は反動も無く飛び上がり若者の背後から細紐を首に巻いて

締め上げた。

また別の日には袋竹刀を振りかざした相手に対し懷に忍ばせた鉄片を五つ投げ、そのすべてが袋竹刀に突き刺さつことで一同は驚愕した。

無論このことは静香の飛び道具が正確無比であることの証しにもなつた。これが本当の戦いなら、顔でも手でもあるいは首筋でも静香の投げた鉄片を避けるのは難しい事を証明していた。

「静香どのはそれほどの技をお持ちなのに女忍びではないというのが不思議です

な」

「静香どのは独り身ですか」

など質問攻めにあい静香は苦笑していた。

ところで春貞は、尾張に滞在中思いもかけずこれまでわだかまりを持つていた父徳川綱誠の心情を知り、墓参りに出向いたことが一番の成果だと思うに至った。徳川綱誠が眠る建中寺は慶安四年（一六五一年）尾張二代藩主光友が、父義直の菩提のために創建したのが始まりで以後、尾張徳川家の菩提寺となつた浄土宗の寺である。

その墓参りも無事済ませた春貞にとつて一日も早く江戸向島の屋敷に戻りたかつ

たが、春貞には最後の重要な密命が残っていた。

それは将軍吉宗から直々の命であつたが、これまで同行の者たちにも詳しい話しはあえてしていなかつた。

その重要な役目とは京都に立ち寄り、吉宗すなわち征夷大將軍の代理として天皇側近の関白一条兼香いちじょうかねよしに親書を手渡すことだつた。

春貞にとつては実に気の重い役目であつたが吉宗に命じられれば嫌とは言えなかつた。

春貞は札差近江屋の離れで抜けるような青空を見つめながらあの日の事を思い出していた。

それは春貞の屋敷を訪問した家重から七月十日に登城せよとの吉宗の命を受け横手富三郎と登城した春貞は意外な命を受けることになつた日のことだつた。

富三郎は白書院の外で待つていた。

吉宗は、

「文をな、届けてもらいたいのじや」

と言つた。

「宗勝様宛でござりますか」

春貞が問うと、

「いや、宮中…京都御所じや」

と呟いた。

「う、上様。京都行きはまだしもそれがしに御所に上がれと命じられますか」と抗弁しようとした。

「断ることは許さん」

吉宗は珍しく厳しい物言いをした後、しばし言葉を選ぶように無言でいたが、

「春貞。承知かと思うが幕府と朝廷との間の連絡は公家から武家伝奏と呼ぶ役職を置いておる。

禁中並公家諸法度によりこの者たちでなければ情報の行き来はできないようとの配慮よ」

吉宗は一息入れた。

禁中並公家諸法度とは徳川家康が臨済宗の僧、こんちいんすうでん金地院崇伝に命じて起草させた法度である。公家諸法度ともいう。

慶長二十年七月十七日、二条城において大御所徳川家康、二代將軍徳川秀忠、前関白二条昭実の三名の連署をもつて公布された。

幕府が「天子は御学問のこと第一」といつた朝廷、公家のみならず天皇までを包含する基本方針を明確にし、朝廷の権威に対して武家の権威を確立した基本法であり「武家諸法度」と違つて幕末まで改訂されることはなかつた。

そもそも幕府は大名たちが朝廷に接近することを危険視し嫌つた。そして天皇に謁見するには相応の官位が第一条件だつたが、逆に理屈では官位を持つ大名なら誰でも天皇に謁見することは可能なはずだ。しかし實際には全くないといつてよいほど接触の例はなかつた。

ということで實際には京都所司代といえども天皇との謁見はまずあり得なかつた。ただしこのような規則においても例外がある。

実は征夷大將軍の代理として伺候する場合なら謁見可能であつた。

無論幕臣でも無く一介の浪人者の春貞は御所を訪ねることさえできるはずはなかつたが、今の春貞は征夷大將軍である吉宗の代理として京都に入つたのだ。

白書院での話であつた：。

「春貞。でな、本来ならその武家伝奏に取り次を依頼するのが筋じやが、ここだ

けの話し、この文は幕府の正式なものというより余の私信なのじや。

したがつて記録に残したく無いことでもあり、尾張に行くお主に余の代理として
関白いちじょうかねよし一条兼香に直接手渡してほしいのだ」

と小声で命じた。

なるほど、今日は小姓も目付の姿も見えないと思つたが、これがためだつたのか
と春貞は納得したが、どう答えて良いか迷つていた。

察した吉宗は、

「お主は以前家重に争いの無い泰平の世が続くことを願つてゐるといつたそ
うだ
な」

「確かに申し上げました」

春貞が答えると、

「將軍後継に関しても長幼之序が天下を納得させるに重要なことだとも言つた
な。さらにできるだけ早く決めるべきだと余に申したな……」

「御意」

「そのためにはな、世継ぎを速やかに混乱なく無事執り行うための意思疎通は老

中というか城内だけに留まらないのだ。

でな、一番神経を使うのは朝廷との複雑な根回しが重要なのじや。

余の命はその布石でもあるのだ春貞。

こんなことはお主にしか頼めぬ。

よいな」

吉宗は破顔し手を叩いた。

するとそれを待つていたのだろう、小姓が三宝をうやうやしく春貞の前に置いた。

小姓が下がると吉宗は台座から降りて春貞の眼前まで近づきどかりと座し、懷から奉書に包まれた文の束を三宝に重ねて置いた。

春貞は思わず平伏したが、吉宗は、

「内容は近々征夷大将軍を長男家重に譲位する予定であること。そして余は大御所として後見役をしばし務めることなどが内々の話として書いてある。無論後継が家重だということはまだ明言できぬから絶対に他言は無用じや。一通は関白宛、もう一通は陛下宛ぞ。

そしてな、ここに金を用意した。

ただ働きさせるわけにはいかぬ。黙つて受け取れ」

「ははつ」

春貞が再び平伏すると声を落とした吉宗は、

「春貞。これが：今回の命はな、余が將軍としての最後の頼みとなるであろう。お主は堅苦しいことが嫌いなことは余も承知しておるが、くれぐれも頼んだぞ。そしてな、暫くぶりの故郷を楽しんで来い」

と言つた。

そう言われば春貞に断るすべはなかつた。

立ち上がつた吉宗はその片手を春貞の肩に触れ、大股で白書院を退出した。

二

「春貞さま。明後日にお発ちとのことでしたがご変更はございませぬか」
近江屋金次郎の呼び掛けに春貞は我に返つた。

「はい。大変お世話になりましたが、予定通り発ちたいと思います。

それにちと予定を変えせつかく名古屋まで来たので京へ二、三日逗留してみようかと思いましてな、殿にもその旨を申し上げました」

春貞がそう答えると、

「それはそれはようござりますな。

いまなら紅葉も真っ盛りでございましょう。

それではお戻りの際にはまたお立ち寄りいただけますな」

金次郎は茶と茶菓子を勧めながら問うた。

「そうしたいところですがな、京での滞在を帰路で取り戻さねばなりません。どうのような仕儀になるかは分かりませぬが、もし名古屋に泊まることになりましたら必ず立ち寄らせていただきましょうぞ」

春貞は無難なことしか話せなかつた。

第一京への旅は本当の所、物見遊山ではなかつたし、天子のおわす御所でどのような仕儀となるかは想像もつかなかつた。

そして当然帰路にはまた尾張国をすることになるが、正直春貞はできるだけ早く通過したかつた。

春貞は昨日、別れを前にして徳川宗勝と会つた際の会話を思い出していた。

「宗勝は、

「兄様。このようなお願いは今後なきよういたしますので今回のご無礼お許し下さい」

と再び詫びた。そして、

「また今回の兄様への願い、それがしにとつて万鈞の重みがございますが、礼だと金を積んだところで叱られるだけ。しかし代わりになるようなもの、この宗勝には刀しか思いつきませぬ。」

ここに三振りの太刀がございますがいざれも尾張で大切に伝わつたもの。
是非是非お受け取りいただけませぬか」と真顔で春貞に迫つた。

「ははっ。有り難き幸せ。」

殿、ここで拝見して宜しゆうござりますか

春貞はことわつてしまし眼前に並べられた三振りの太刀の検分をはじめた。

「ふうむ…殿。これはもしや郷義弘ではござりますまいか。」

そしてこちらの二振りは兼元…。

であるなら、あまりの名刀たち。これらはいただく訳にはまいりませぬな」

微笑を浮かべながらも固辞した春貞に宗勝は、

「さよう。いまお手にあるものは郷義弘作の一振り。

郷義弘作『五月雨江』で知られている一振りは家光様の御娘千代姫様がこの尾張藩二代光友様にお輿入れされた際に引き出物として秀忠様から下賜され尾張に伝わつておる業物ですが、それと合わせて打たれたものと聞き及んでおります」
一息入れ、

「くどいですが兄様を手ぶらでお返しするような無礼はできませぬが、ここに千両箱を三つ積んでも兄様はお喜びになりますまい。

是非この宗勝の誠心の証しとしてお受け取りくだされ。

兄様はこれらの名刀に匹敵する以上のお働きをしてくださつたのですぞ」と言い切つた。

「ははっ」

今度は素直に平伏した春貞は頭を上げ、

「殿。それではありがたく頂戴いたしますが、不遜ながら春貞お願いがござります」

「なんなりと…」

春貞は先般尾張に出立する前に自分は家重から名刀を一振り授けられたことを話し、己の持論であるが刀は剣者にとつて飾り物であつてはならぬと常々肝に命じていること。

したがつてこの三振りの名刀、我を助け日々命をかけて働いてくれている屋敷の剣者たちに授けることをお許しいただきたい。

そしてせつかく尾張まで足を運んだので三日四日京で紅葉を楽しんでみたい。ついては貴重な三振りの刀、持参して戻るにはご無礼ながら些か荷物になる由、この郷義弘のみ受け取らせていただき、後の二振りは来年参勤で江戸へお越しの際にご面倒でもお持ちいただけまいかと願つた。

宗勝は、

「ほう。屋敷の剣者というと格差らですかな」

「御意」

「なるほど。しかし兄様に受け取つていただいた後はいかように扱われても余に異存はありませんぬ。

またご指摘のとおり旅を続けるには些か荷物になろう故、仰せの通り参勤のとき

兼元の二振りは持参しましようぞ。

出立の際、お見送りはいたしませぬが京をお楽しみあれ」と破顔した。

名古屋城と宗勝に別れを告げた春貞は近江屋に戻り、己の座敷に横手富三郎を呼んだ。

「春貞さま。いよいよ京に向かわれますな」

「うむ。でな富三郎、先ほど殿から授かつたこの一振りだがお主に使つて貰おうと呼んだのだ」

と郷義弘作の業物を差しだした。

「な、なんと。しかし先輩格のお二人を差し置いて新参者のそれがしがこのような名刀をお受けするわけにはまいりませぬ」

と座していた体を引きながら辞退した。

「お主らしくてよい心懸けぞ。しかし格差と万之助には来年殿が参勤の際に兼元作の二振りをお持ちくださるそうだ。

これまでの働き、そしてこれから密命を持つて向かう京行きに際して富三郎、お主に使つてもらいたいのじゃ」

春貞が再度一振りを突き出すと、

「ははつ。まことに：有り難き幸せ。

それがし等が本来一生かかつてもお目にかれぬ代物、大切にそしてお役に立つ
よう精進いたします」と両手で拝受し平伏した。

「となりますと宮から桑名までは七里の渡しをお使いになられますな」

金次郎が茶を啜りながら言つた。

再び我に返つた春貞は、

「はい。それが一番楽で早道と聞きました。

で、七里の渡しの途中といつては語弊がありますがまづは熱田に参詣し母を保護
していただきお礼を申し上げたいと思つております。

それに、その七里の渡しは尾張藩の管轄だそうですな。
殿が便宜を図つてくださるそうです」

春貞が答えると金次郎は、

「さようですか。それではお役に立つかは存じませぬが京の宿で懇意にしている

ところがござります。早速紹介状をご用意させていただきましようぞ」と俯いたが、隠居の金右衛門は臥所の中で春貞の手を握り、涙ながらに別れを告げた。

もし二か月後に再び春貞らが帰路に立ち寄つたとしても己の命が尽きているであろう事を予感していたに違いない。

春貞一行は近江屋に別れを告げる際、二十五両の包金を二つ金次郎の前に置いた。

「二か月余りのこの方、いろいろとご迷惑をおかけしました。

また上げ膳据え膳の日々をありがたく頂戴いたしましたがこれはささやかな御礼。分限者に金とは無粋ですがお納めくだされ」

春貞が両手を膝の上に置き頭を下げた。

金次郎は、

「本来なら断じてお受け取りできないものですがここは一応お預かりということでお頂戴しておきましょう」

と受け取つてくれた。

「それよりなにより正直なところ、いろいろと肝が冷える出来事もございました

が、皆よき思い出でございます。

また春貞さまが懇意にしてくださる御店ということでお城からも特別の目で見ていただけるようになりました。

ありがとうございます」

金次郎も目に涙を浮かべていた。

近江屋を後にした一行は京に向かう前に熱田神社（熱田神宮）へ立ち寄った。

熱田神社は四年前、亡くなつたと思つていた春貞の生母弥生がこの熱田に匿われていたことへの礼にと立ち寄つたのだつた。

二度目となつた夏穂の案内で社殿に参拝した一行は社務所の宮司に、

「江戸から来た松平春貞と申す。大宮司千秋正季さまにお目にかかりたいが…」と願つたが一昨日から京に向かつて留守だとわかつた。

残念ながら戻るのを待つてゐるわけにもいかず、春貞は事情を説明し奉納だとして百両を差し出し先を急いだ。

一息入れた際、

「春貞さま。まさか京への道のりで待ちぶせされることはございませんでしよう

な

前方を注視しながら富三郎が呟いた。

「どうかな。名古屋は町屋にしろ尾張の目があつたから襲うことも出来なかつたのであらうが、こうした旅の過程は敵にとつては狙いやすいだらうよ。注意を怠らないことだな。

そうそう、くどいようだが京に入つてからも一人で出歩かないことだ」

春貞は言い切つた。

結局、七里の渡しを使い四日市宿、関宿、石部宿そして体を休めるためにと大津宿に泊まり、日の高い内に京の都に入つたが道中何ごともなかつた。

三

こちらは江戸向島の屋敷…。

相変わらず春江館には女弟子二十人と理子そして奈美の黄色い声が響き、ときには

堀田万之助や米道格左衛門の太い声が聞こえていた。

奈美はもともと敵討ちのため強くなりたいと春貞を頼つたが満願成就し今では留吉と結ばれ一子まで授かつた。しかし初心忘れるべからずと時間が空くと春江館で木刀を振る事を忘れなかつた。

一方診療所ではこれまた連日のように患者が列をなして順番を待つていて小川笙船と井之上新界、そしておよしの奮闘が続いていた。

診療部屋に田宮助左衛門が帳面を持つて現れた。

「先生方、九つ半頃に例の注文していた薬類が届きますのでよろしうお願いしますぞ」

「おお、早速で助かる」

喘息の老人の診察を終えた笙船が答えると新界が、

「田宮さん、この前ご相談したツゲ材ですが良質のものは見つかりませんか」と問うた。

こここの所義歯の申込みが増えており、いわゆる予約注文をせざるを得なくなつたが反面良質のツゲ材が欲しい時に入手できなければ義歯は作れず新界は不安を募らせていた。

「そうでしたな。いま材木商麒麟屋に問い合わせておりますが、意外なというと叱られましようがな、浅草の乾物問屋の前田屋さんと行き会つたときには念のため訪ねてみましたら櫛とか簪作りに使う良質のものが手に入るとのお話しでしたので見本をお願いしております」

助左衛門が言うと、

「おお、前田屋さんといえば主人は福治郎さんでしたな」

笙船が思い出したように言うと助左衛門が、

「さようでございます。

以前に…それがしがご奉公させていただく前に先生とお会いになつたことがおありだと喜んでおられました」

と破顔した。

「そうそう。あれは向こうの竹屋の渡しで酒に酔つた二人組の侍が数人に怪我をさせたな。それだけでなく不幸にも前田屋の手代だったかが腹を刺されて亡くなつたのじやつた。

その後で主人が礼に見えたのじやよ

「さようでございましたか」

「前田屋の主人なら人物も上々。

きっと気持ちの良い買い付けができようぞ、井之上先生」
笙船も喜んだ。

破顔した井之上新界が手を洗いながら、

「そういえば、春貞さまたちはいまどちらにいらつしやるのでしようか」と呟いた。

「そうよなあ。尾張の滯在は上様のお達しで最長二か月と決められておつたで

な、今頃は京に入つた頃かも知れんのう」

診療室の窓から見える赤く色づきはじめた木々を眺めながら笙船が答えた。

「お次の方どうぞ」

およしの声に、

「我らももうひと頑張りじやな」

笙船と新界は顔を見合わせて頷きあつた。

一方、春貞一行。大津を発つて十里ほどで京だが、

「やはりお寺が目立つようになりましたね」

静香が嬉しそうに呟いた。

「静香さんは京は初めてかな」

富三郎が問うと、

「初めてでございます。夏穂さまも初めてですか」

「はい。私も初めてですが父上も初めてでしたね」

夏穂の問いに春貞は、

「遠い昔の事だが、俺が十歳のときだ。長崎に預けられることになりやはり宮宿

から歩いてな、通り過ぎただけよ。

まつたく知らんので富三郎が頼りぞ」と笑つた。

「春貞さま。確かに京の宿は近江屋の主人が紹介状をと申されましたな」

富三郎が聞くと春貞は、

「うむ。榊屋さかきやという歴史のある宿だそうな。

三条大橋を直進し油小路を少し下った所にあると聞いたが、富三郎分かるか」と逆に問うた。

「はい。京の町はご承知かと思いますが碁盤の目のように整備されておりますで
な、一度要領がわかれれば覚えやすいと思いますぞ」

「そうか。どのような場所ぞ」

「さよう、油小路通をどの程度入ったかによりますが、二条城と御所も近うござ
いますな」

富三郎が物知り顔で答えた。

「ほう、それは好都合」

春貞はそう応じた。

「父上、あれが鴨川でしょか」

すでに水音が聞こえ始めていたが、富三郎は、
「鴨川ですな。そしてあれが三条大橋……」

と前方を指さしながらそのまま、

「春貞さま、どうやら前後を挟まれたようですね」

と小声で呟くと春貞は、

「うむ。歓迎の出迎えではなきそだ。」

夏穂、静香、油断するな」

そう言いながらも歩みを止めずにそのまま直進した。

大橋のほぼ中央まで進んだとき、前方から五人が抜刀し走ってきた。富三郎が振り向くと後方からも編み笠を被つた六人が足早に向かってきた。

「春貞さま、前方はお任せを」

懐に手を入れた静香がそう言いながら刺客に向かつて走り出した。

思わぬ動きに五人がたじろいだ刹那ふわりと浮き上がった静香はそのまま鉄のつぶてを横に縦に投げた。

「ぎゃあ」

「うわあっ」

つぶては刺客の顔にめり込み、視覚を奪われた男たちは完全に戦意を喪失していた。

背後で富三郎と夏穂が六人と戦っていたが、ひとりがすり抜け春貞に刃を向けたまま走ってきた。

ふわりと交わした春貞は大橋の欄干を背に留まつたかに見えたが刃を返した男の切つ先は執拗に春貞を追つた。

「ガキーン」

「ぐはつ」

いつ抜いたか、春貞の剣がきらめいた瞬間、胴を抜かれた男は勢い余つて橋の上から鴨川に落ちていった。

大橋を渡ろうとしていた町人や商人風の男女が呆然と見守っていたが、後ろの人もすでに息のある者はいなかつた。

「大事ないか」

春貞が声を上げると、

「大事ございませぬ」

と富三郎が血降りした刀を早くも鞘に収め、夏穂はまだ血が滴っている刀を手に倒した男たちの顔を一人一人確かめていた。

「どうだ夏穂、知つた奴はあるか」

春貞の問ひに、

「父上、おりませぬ」

と息も切らさず夏穂が答えた。

その後一行は名古屋の札差近江屋の紹介状を持ち、油小路を少し下つた所にある宿、榊屋に入ったが後をつけられている気配はなかつた。

さすがに分限者近江屋の知り合いということで榊屋の対応は丁寧だつた。

春貞は三日ほど逗留するつもりだと言い、前払いだと包金二十五両を女将に差しました。

女将はさすがに驚いたが春貞は、

「女将。俺たちは紹介状はあるにしても一見いちげんの客だ。また京は初めての者が三人もいる。いろいろとな面倒をかけると思うでこれは前金として預かってくれ。そしてな、万一不足なら遠慮無く言つてくれ」と磊落に話しかけた。

どうやら紹介状には春貞の身分についても書かれていたようで女将をはじめ店の者達の扱いは大変気持ちの良いものだつた。

部屋は春貞、富三郎がそれぞれ一部屋、そして夏穂と静香で一部屋があてがわれたが夕餉は春貞の部屋に皆が集まつた。

「父上、こちらの味付けは屋敷の富四郎さんのと似ておりますね」満面の笑顔で夏穂が言つた。

「そうか。確か富四郎も若い頃京で修行したようだからな」

春貞もさすがに腹が減ったのか飯を頬張つた。

「ところで春貞さま。これからはいかがなりますので」

富二郎が椀を持つたまま問うた。

「そうだな。そろそろきちんと話をしておこうか」

丁度女衆が小さな京菓子と茶を運んで来たが、

「済まぬがこれから内輪の話をしたいで、呼ぶまでこの部屋には誰も近づけないでくれ」

春貞は笑顔で子粒を握らせた。

「承知いたしました」

宿の配膳が片付くと春貞は、

「さてこれから密命の話しをする。これは上様から命じられたことで当然のことながら内々の話しゆえこれまで皆にも伏せていたがこれからはどういうことなのかを承知して行動して欲しい」

「はい」

「承知しました」

茶をひと飲みした春貞は、

「明日、御所に伺い関白一条兼香どのにお目にかかり、上様からお預かりした密書をお渡しする…」

とまず宣言した。

「ゞ、御所でございますか」

富三郎は息をのんだ。

第三代尾張藩藩主の息子だとはいえ幕臣でもなく一介の浪人身分の春貞が天子のおわす御所に入れるものではないことぐらいは知っていたからだ。

「うむ」

「春貞さま。密書とは…」

思わず静香が問うた。

「俺も何が書かれているかは知らねえ。しかし上様の言い様から判断するにお世継ぎに関することらしいな」

「ほう…」

「ここだけの話しだが、上様はどうやら次期将軍に家重さまをお決めになつたようだ」

春貞は静かに言つた。

「となりますが、我らが襲われた理由はその密書だということになりますかな」

富三郎が天井を仰いだ。

「そうだろうな。密書には：想像だが家重さまにお決めになつた理由やあらかじめ朝廷の理解を得たい内容が上様直筆で書かれているに違ひねえ。

それが閑白、いや天子さまに渡つてしまつたら非公式の文にしても、まあ決まつたことになつちまう。

どこやの老中首座あたりは最後の巻き返しに躍起となつてゐるに違ひねえな」

春貞も腕組みしながら体を揺すつていた。

静香が「はつ」とした顔をして、

「春貞さま。もし老中首座なる人物がそこまで覚悟を決めたなら、畏れ多いことでございますが上様のお命を：いや家重さまのお命を縮めようと考えるのでありますぬか」

さすがは武士の娘、的確な危惧だった。

富三郎もはつとして春貞を見た。

「よういつた静香。

近江屋でな、俺は上様宛に文を書いた。

道中待ちぶせされ襲われたことを報告し、俺が上様の意を汲んで尾張あるいは京へ登ることを知りうる人物が関係しているに違いないこと…。また襲撃は俺の命を奪うと同時に密書を破棄することにあると思われ、だとすれば上様のお世継ぎのお考えに異を唱える者の仕業。

万一のこともお考えになり、春貞が戻るまで身辺を一層厳重にお守りくださるようにな、願つておいたで、すでにお目を通していらっしゃるに違いねえ」

春貞がぼそつと答えた。

「さすがでござりますな。

となれば今夜明日が勝負所ということになりますな」

富三郎が丸い顔を引き締めて言い切つた。

「父上、では今夜は寝ずの番とされますか」

夏穂も真顔で問うたが春貞は、

「いや、町屋で大騒動は奴らも好むまい。

また念のため、宿の廻りは佐吉とその手の者たちが影護衛しているはずだ。

俺たちは明日のこともある。安心して休むが良い」と答えたが続いて、

「その明日のことだが、御所に無事に入れるかどうかは俺にも分からん。とはい
え御所には俺一人が出向くから途中までお主たちも一緒についてくれ」と春貞は命じた。

四

実は春貞が佐吉に託した文は八代将軍吉宗宛だけではなかつた。

向島の屋敷の幸江宛に近況と共にはじめて密命のことを綴つていた。

文は幕府隠密らの手により三日後には江戸に届いていたが、幸江はことの重大さを鑑み居間に田宮助左衛門、米道格左衛門、堀田万之助そして留吉を呼び春貞の文を回覧した。

「な、なんと春貞さまが天子さまがおいでのお所にですと…」

助左衛門が唸つた。

「若奥さま。上様からの密書を天子さまにお届けすることが密命だつたわけです

な

格左衛門が呟き万之助も頷いた。

「それにしてもやはり待ちぶせされたようですね。
京では何ごとも無ければよろしいですがな」

留吉も心配顔だ。

「でも…助左衛門どの。一介の浪人者が密命とは言え御所に入れるものでしょ
うか。そしてまさか天子さまに拝謁するなど有り得ることなのでしょうか」

幸江も不安顔で問うた。

「はい。それがしも宮中のしきたりに詳しいわけではございませぬが一般には京
都守護職であつても拝謁は無理ですな。

徳川將軍であつても確か家光さま以降、天子さまに直接お会いしたお方はいらっしゃ
らないと聞き及んでおりますがな。

無論これは天子さまが云々以前に徳川側の思惑あつてのことだと推察されますが
な

助左衛門も唸つた。

「ただし、文には関白さまに文を渡すと書かれておりますな。であれば上様の代

理で向かわれるのなら文はお渡しできるのではありませぬか」

万之助も思いを口にした。

「若奥さま、旦那方。文の最後に格左衛門さまや万之助さまが襲われた例もある。しばらくの間、屋敷の警固を厳重にし、一人で外歩きはするなどありますな」

留吉が一同を見回して言つた。

「お世継ぎ問題がからんでいるとなれば、手段を選ばずとなるやも知れぬ。この城は是非にも我らがお守りしなければなりませぬぞ」

格左衛門が覚悟の顔で言い切り一同が頷いた。

「この文、これから母上にお見せいたしますが、概要は助左衛門どの、笙船先生方にも後ほどで結構ですからお話しくだされ」

幸江が願つた。

「承知いたしました。

それでも春貞さまはすでに京にはお入りになつたはず。
いかがされておりますのか、気になりますな」

助左衛門が西の空を仰いだ。

京の春貞たちは一泊目の宿で何ごとも無く過ごし夜が明けた。

朝餉の配膳に部屋へ入ってきた女衆が朝の挨拶の後、

「お食事の後で、どちらかにお出かけおすか」と声をかけた。

春貞は如才なく、

「京は初めてでな、せめて天子さまのおわす御所の廻りくらいは歩いてみたいと思つておる」

本心も混ぜた当たり障りのない答えをすると、

「そうどすか。いま少し北の方に御御足を向ければ紅葉の見所おすえ」と教えてくれた。

「できればゆるりと散策などしたいところだが野暮用もあつてな

春貞が応じると夏穂と静香が含み笑いをしている。

女衆が下がると富三郎が、

「確かに春貞さまにとつては大変な野暮用でございましようかな」と笑いながら箱膳の前に座した。

そのとき、襖の隙間から小さな紙を捻ったものが投げ込まれた。脇差しに手をかけつつ富三郎が近づくと春貞は、

「佐吉からのつなぎであろう」

と呟いた。

富三郎から捻った紙を受け取つた春貞が開くと思つた通りそれは佐吉からの報告であつた。

「何ごとでございましようか」

静香が不安そうに身を乗り出すと春貞はそれを差しだした。

「読んでみよ」

「はい」

そこには御所に至る二箇所に待ち人がいる旨が書かれてあつた。

「やはり易々と密命を済ますことはできそうもないな」

春貞は苦笑いしながら、

「とはいえ行かずばなるまいよ」

と言い切つた。

支度を終えた春貞らは宿の女将に三つ指ついて送られた。本来なら將軍の代理として宮中に上がるならそれなりの儀礼服着用が求められた。

例えば將軍から従五位下までの官職にある者は、束帶や衣冠を着用した。これらは最上級の装束である。

これに次ぐ高位者からお目見え以下の無位無冠の者までの礼服は、武家独自の服饰を用いた。

しかし春貞は無地の熨斗目に半袴であり、いわば通常勤務で登城するお目見え以上のお公服であった。そして腰には父徳川綱誠の形見である栗田口吉光作だと伝えられる脇差しと吉宗から下された葵紋が飾られた一振りを下げていた。

「春貞さま。御所に上がるのに袴でよろしいので」

静香が心配そうに言うと、

「そうよなあ。しかし俺は束帶や衣冠など持っていないし着たくもねえ。これが精一杯の誠心を表したつもりだが、これで追い返えされたら喜んで逃げ帰つてくれるさ。一応徳川葵の紋も付いているんだがな……」
と笑つた。

ちなみに袴だが、通常は上衣である肩衣と袴とが共布であり、地質、色、柄を同じくすることから上下かみしもと呼ばれたという。

宿を出た一行は歩行かちで御池通まで上がり、右折して烏丸通を左折した。今日御所とは丸太通りと今出川通りで南北を、寺町通りと烏丸通りで東西を区画されている。しかし当時、現在の京都御苑一帯は公家の邸宅が建ち並んだ邸宅街であった。

無論春貞が目指すのは禁裏すなわち天皇がおわす場所である。

丸太町通りを右折しようとしたとき、烏丸側からと丸太町側から数十人の武家が笠を被つたまま駆けてきた。

「やはり出おったか。

天子のおわす御所を前にして不敬なやつらよ」春貞は刀をすらりと抜き切つ先を下げた。

そして、

「行く手を遮る者は容赦なく斬る」と叫んだ。

富三郎と夏穂も鯉口を切り静香は懐手をして構えた。

廻りにはまだ人通りは無かつた。

無言の武士たちは合わせて二十五人あまり。皆拔刀したまま決死の覚悟で駆け寄り切り込んできた。春貞の愛刀がきらめいた刹那、先頭の男の首が飛び、二人目と三人目の右腕が刀を握つたまま空に舞つた。

「うわあああ

と悲鳴が上がつたがその悲鳴を合図とするように全員が丸太町通りを走つた春貞ら四人を取り囲んだ。

静香が飛び上がりながら両手を振ると数人が顔を押さえて転げ回つたが、それらを踏み越えて残つた者達が怒濤のように切り込んできた。

富三郎にしろ夏穂にしろ今までになく接近戦を強いられたものの一人はほとんど立ち位置を変えずに抜刀すると血しぶきが続いた。あつという間に十数人が転げ回つた。

「ぎやあああ

同時に後ろにいた数人が声を上げて倒れるとその影から佐吉が現れた。そしてあつと言う間に武士たちの頭上を飛んだと思つたらさらに三人が頭を割られて即死

した。

残りはすでに三人だけとなつて形勢は逆転した。

春貞は、

「誰に頼まれたかを話せば命だけは助けてやろう」

と息も切らさず呟いて刃を向けた途端、三人は無言で己の刀を首筋に当てて一気に引いた。

「ううつ」

止める間もなく三人は自決しその場に崩れ落ちた。

「見ればほんどうが若い奴らではないか。

あたら命を無駄にさせおつた奴は許せん」

春貞の憤怒の顔が富三郎にはまるで愛染明王のように輝いて見えた。

騒ぎを知った御所の警備陣が駆けつけたときにはすでに片は付き、血の海に二十人が横たわっていた。

「春貞さま。我らは春貞さまがお戻りまでこの付近におりましょう」

富三郎が言うと、

「分かった。佐吉、ご苦労であつた。

これで終わりだと思うが、決して一人になつてはならぬぞ」

春貞の命に四人は無言で頷いた。

春貞は血ぶりして刀を收めながらふと気がつくと、小袖の一端に小さな返り血を浴びていた。しかしすでに着替える余裕はなく、春貞はそのまま警備の一人に事情を話し、丸太町通り側の堺町御門から公家町に入つた。

その後、厳しい警固の禁裏西側の宜秋門(ぎしゅうもん)で名乗り、吉宗の代理であることを示す文を差し出すと早速警備陣に御車寄せへと案内された。そして参内した人の控えの間であるという諸大夫の間でしばらく待つていると衣冠姿の中年の公家がにこやかに入ってきた。

「よう参られましたな松平春貞さま。
身共が一条兼香であらしやいます」

と和やかに声をかけた。

一条兼香は桜町天皇の側近として活躍し、従一位関白左大臣・太政大臣を歴任して十四年にわたつて朝廷の中枢にあつた実力者だつた。

そして元文二年（一七三七年）関白となつた兼香は、東山天皇の時代に一度は復活しながらも財政不足から次の中御門天皇時代には開けなかつた大嘗祭復活のための支援を江戸幕府に求めた。

大嘗祭だいじょうさいとは、天皇が即位の礼の後、初めて行う新嘗祭にいなめさいのことだ。

將軍徳川吉宗も朝廷の伝統儀式の復活に賛同を示し、翌年元文三年には朝廷念願だつた桜町天皇の大嘗祭が開催される事になつた。

また元文四年には吉宗の依頼により、当時の和歌に優れた四人の公家（中院通躬・烏丸光栄・三条西公福・冷泉為久）を推挙して吉宗に自作の和歌を提出させているなど幕府と朝廷との関係はまづまづの状態だつた。

「松平春貞でござる。

それがし、かような場所に座す身分ではございませぬが、征夷大將軍徳川吉宗さまの代理として親書をお渡しするよう命じられ罷り越しました」

春貞は、一通は天皇宛、もう一通は兼香宛ての親書を静かに懐から差し出した。

「確かにおかみ宛の親書、そしてわらわ宛てもお預かり申しましたえ」

と兼香は頭を下げて呟いた後、

「しばらくお待ちたもれ」

兼香は自分宛の文を押しいだき優雅な振る舞いにて速やかに読んだ。そして時に春貞に笑みの視線を送りつつ再び文に目を落とし二度読んだ後にこれまた静かにたたみ、丁寧に懐に収めた。

無論春貞は文の内容は知る由もない。

「将軍さまは大変なお方を代理にお使いくださいやりましたなあ。

それでも松平さま、はて・血の臭いが・なにかございましたのか」と兼香は問うた。

「はい。その文を狙う者達に丸太町通りで襲われましてござります。

旅の途中、これで三度目となり申した」

春貞が答えると兼香は決意の表情を示しつつ、

「しばし、しばしお待ちたもれ」

と言いながら立ち上がり奥に引っ込んだ。

春貞はその場に座したまま瞑目していた。

今回の旅は己が望んだ訳ではないし、いわばいやいや尾張国に足を踏み入れた挙げ句の果てになんと京都御所の禁裏に座している己を意識するとさすがの春貞も落ち着かなかつた。

不思議なことに瞑目していた春貞の脳裏になぜか一度も会つたことの無い父徳川綱誠の姿がおぼろげに浮かんだように思えた。

尾張へは吉宗の密命を受け、尾張藩主宗勝の強い勧めがあつたために足を向けたが、今となつてはなにやら父親の姿を追いにここまで來たようと思えて苦笑した。

これまで父親は自分を捨てたと信じて疑わなかつた春貞だが一連の旅で親の有り難さが次第に分かつてきてあれほど無視し続けてきた父綱誠を許し、心の中で手を合わせている己を感じていた。

待つこと四半時近くになつて一条兼香が戻ってきたが、

「おかみがお会いになるそうであらしやります。こちらへ…」

と腰を折つた。

春貞が慌てた。

「お、お待ちください、一条さま。

それがし関白さまに将軍吉宗さまの親書をお渡しするため御所に伺いました。陛下にお目にかかるなど考えたこともございませぬし、ご承知の通り返り血を浴びてもおります。お許し願います」

春貞は平伏して断つたが、

「親書が内々ならば、おかみとのご対面も内々のものと承知してたもれ。それにおかみが望んであらしやります。さあ、こちらへ」

兼香は春貞の手を己の両手で持ち上げ、ついてくるように促した。

この後に及んで断る術を持たない春貞は従うしか無かつた。

そもそも江戸時代を通して見ても将軍とて時の天皇に謁見した例はほとんどない。

天皇が行幸して将軍に会つたのは家光時代だけであり、家光以降は十四代将軍家茂まで上洛の記録はないし、その間は将軍名代が天皇に謁見していた。

ちなみに家光の將軍宣下の上洛の際は外様・譜代ら諸藩を合わせて総勢で三十万七千人の軍勢を引き連れた。

現在我々の良く知る京都二条城は、在京中の將軍の宿所として徳川家康が造った城である。ともあれいかに春貞が桜町天皇に謁見することが異例・特例であつたかがわかる。

一一五代桜町天皇は、十六歳で即位し（一七三五年）幼名を若宮、諱を昭仁てるひとといつた。

中御門天皇の第一皇子として昭仁親王は正月元旦に生まれた。

元旦生まれの天皇は神武天皇と垂仁天皇のみであり、また聖德太子が元日生まれということで宮中は喜びに包まれたが難産のため母の尚子は二十日後に亡くなつた。

関白一条兼香の補佐と江戸幕府將軍徳川吉宗の理解と助力を得て朝廷の儀式の復古に力を入れ、五一年ぶりに大嘗祭の再復活や新嘗祭、奉幣使などの他の儀礼の復活にも力を注ぎ、朝儀の復興を通して天皇の権威向上に努めた。

そうした業績から桜町天皇は聖徳太子の再来とも謳われたという。

また烏丸光栄に古今伝授を受けるなど歌道に優れ、御製は「桜町院御集」や「桜町院坊中御会和歌」としてまとめられている。

ちなみに春貞が謁見したその三年後に二十八歳の若さで譲位したが、さらに三年後には重い脚気による心臓不全により崩御している。

春貞が連れて行かれたところは内々ということで内裏の清涼殿ではなく書院造の御学問所だつた。

御学問所は天皇が勉学をしたり、皇子などに親王の位を授ける親王宣下しんおうせんげが行われたり、あるいは和歌の会が催されるなど臣下との会合にも使われた。

春貞は兼香に言われるまま広い部屋を進み、兼香が優雅に指示した場所に座したが正面に御簾みすがかかっておりすでに天皇が座している気配があつた。

周囲には香が焚かれ春貞の血の臭いを消していた。

「おかみ。松平春貞さまであらしやります」

一条兼香の一声で春貞は無言で平伏した。

そのとき、

「兼香。御簾を上げてたもの声がかかつた。

「ははつ」

兼香が低い姿勢で高座に近づき静かに御簾を巻き上げるとそこには御年二十五歳の一一代桜町天皇がにこやかに座していた。

「顔を見せてたもれ、春貞」

若々しくも通る声に、

「はつ。松平春貞にござります。

それがし幕臣でもない礼儀知らず。ましてや宮中の作法も存じ上げませぬゆえご無礼は平にお許しを」

春貞は再び平伏し恐る恐る顔を上げた。

そこには初対面にもかかわらず、どこかで会ったようで懐かしく、凜々しくも厳かで御引直おひきのうし衣に立烏帽子という普段着を纏つた細面の若者が春貞を直視していた。

主な参考文献・資料

- 安藤優一郎「江戸の養生所」
- デイアゴステイニー「週刊江戸 小石川養生所の開設」
- 酒井シヅ「まるわかり 江戸の医学」
- 青木歳幸「江戸時代の医学 名医たちの三〇〇年」
- 菊池ひと美「江戸衣裳図鑑」
- 菊池ひと美「江戸の暮らし図鑑」
- 菊池ひと美「江戸おしゃれ図絵」
- 菊池ひと美「お江戸の結婚」
- 歴史群像シリーズ「図説侍入門 江戸下級武士を知る手引き」
- 森田健司「江戸の瓦版 庶民を熱狂させたメディアの正体」
- 江戸人文研究会「イラスト・図説でよくわかる江戸の用語辞典」
- 江戸人文研究会「絵で見る江戸の人物辞典」
- 野火迅「使ってみたい 武士の日本語」
- 山田順子「江戸の暮らしがわかる本」

稻垣史生「江戸時代大全」

大森洋平「考証要集 秘伝！NHK時代考証資料」

人文社「切絵図・現代図で歩く 江戸東京散歩」

立川博章「大江戸鳥瞰図」

柳生宗矩／渡辺一郎「兵法家伝書 付・新陰流兵法目録事」

柳生耕一平巖信「負けない奥義 柳生新陰流宗家が教える最強の心身術」

村山知義「無刀の伝 柳生新陰流極意」

新人物往来社「剣の達人一一人 データファイル」

人文社「江戸庶民の食風景 江戸の台所」

松下幸子、榎木伊太郎「再現江戸時代料理」

大野恵造「江戸小唄総覧」

江戸風土研究会「地図で読み解く江戸・東京」

NPO法人宗春ロマン隊「徳川宗春伝」

深井雅海「江戸城御庭番―徳川将軍の耳と目」

若桜木虔「御庭番通史」

高埜利彦「日本の歴史（十三）元禄・享保の時代」

氏家幹人「大江戸死体考——人斬り浅右衛門の時代」

塩見鮮一郎「弾左衛門とその時代」

塩見鮮一郎「資料 浅草弾左衛門」

塩見鮮一郎「江戸の非人頭 車善七」

三谷一馬「江戸年中行事図聚」

永井義男「図説 吉原事典」

塩見鮮一郎「吉原という異界」

山崎光夫「薬で読み解く江戸の事件史」

梅原亮「江戸時代の医師修業 学問・学統・遊学」

貝原益軒（著）／伊藤友信（翻訳）「養生訓」

杉田玄白／酒井シズ（現代語訳）「解体新書」

片桐一男「杉田玄白 蘭学事始」

長尾剛「話し言葉で読める『蘭学事始』」

梅原亮「江戸時代の医師修業学問・学統・遊学」

歴史群像編集部・編「時代小説用語辞典」

大石慎三郎「大岡越前守忠相」

童門冬二 「大岡忠相 江戸の改革力 吉宗とその時代」

羽生和子 「江戸時代、漢方薬の歴史」

高崎哲郎 「天一切ヲ流ス—江戸期最大の寛保水害・西国大名による手伝い普請」

山口 正之 「忍びと忍術」

山田雄司 「忍者の教科書」

長谷川正康 「江戸の入れ歯師たち—木床義歯の物語—」

山本博文（監修） 「江戸の錢勘定 庶民と武士のお金のはなし」

石川英輔 「実見 江戸の暮らし」

八幡和郎 「歴代天皇列伝」

高森明勅監修 「歴代天皇事典」

伊東宗裕構成 「別冊太陽 京都古地図散歩」

名古屋市博物館 「名古屋城下お調べ帳」

「V.A. / TRADITIONAL FOLK SONGS OF JAPAN」 CD

町田嘉章／浅野健二編 「日本民謡集」

服部竜太郎 「日本民謡集—ふるさとの詩と心」

Wikipedia

あとがき

「首巻き春貞」第十二巻（拝謁）をお届けする。

本編で山田浅右衛門吉時が逝つた。これは史実なので仕方のないことだが、この人物を調べれば調べるほど私の理想とする侍の姿に合致してくる。そしてどういうわけか幕末の江戸城無血開城に一役買った山岡鉄舟とイメージが重なつてきた。

無論時代も違うし性格もその人生もまったく違うものの、本物の侍とはこうした人物なのだろうという点でイメージが重なつてくるのだ。

ただし浅右衛門吉時は誕生年も不明であるばかりかその死に様もほとんどわからぬ。とはいって何年何月何日に死んだとだけで済ませてしまうのはいかにも残念なので山岡鉄舟の死に様を浅右衛門吉時に重ねた。

ここにきてつくづく思うことは例えフィクションであり筆者が生み出した人物であつても死に至らしめる難しさだ。

難しいというより感情移入をしてしまうためにできれば殺したくない(笑)。

もともと本作は時代小説とはいえるだけ殺伐な話題テーマは避け、心安らか

に楽しんで読んでいただくことを念頭にいれて書き始めたが、現実は過酷で厳しく、飢饉もあれば大水害も起ころ。

それらは曲げることができないし、物語のスタートから二十一年も経てばそれだけ皆歳を取ることは避けられない。

だから、登場人物の何人かは死なせないで済むはずもなくしぶしぶ死に様を考えなければならない。

したがつて本小説による山田浅右衛門吉時の死に様はフィクションなので念のため。

そして本編一番のキモは主人公松平春貞に京都までの旅をさせたこととなによりも御所で時の一一五代桜町天皇に拝謁させたことに尽きる。

一介の浪人者が天皇に拝謁とはありそうもないことだが、そのありそうもないことを実現させてしまうのが小説を書く醍醐味であり魅力でもある。

さらに今回、主人公を尾張国名古屋に向かわせたことから当時の名古屋城下の様子を知りたいと名古屋市博物館から刊行されていた「名古屋城下お調べ帳」といふた資料を見つけたり、旅の途中で雲助に謳わせた「箱根駕籠昇唄」を確認したいとその歌詞を探すのに時間を費やした。

書き殴つて済ませても良いのだろうが、凝り性故己が納得できないと先に進めない。しかしこうした些か歴史に埋もれつつある情報はインターネットで検索して済むわけでもなく古本を探しまくつたりもしたが、振り返つて見ればそれがまた楽しみのひとつになつてゐる。お楽しみいただければ嬉しい。

二〇一八年十一月

東京都多摩市の自宅兼仕事場にて

松田 純一

本書の無断複写・配布は著作権法上での例外を除き禁じられています。

くびま はるさだ はい えつ
首巻き春貞 拝謁 (決定版)
松平春貞一代記 (十二)

2018年12月3日 第一刷
2018年12月12日 第一刷
2020年5月12日 第三刷 (決定版)

まつだ じゅんいち
著者：松田純一
<http://www.mactechlab.jp>

表紙デザイン：Junichi Matsuda
